

110

新編 文庫 全



夕霧郭文章席

夕霧伊左衛門の事蹟ハ何某の隨筆及び二三の小説本に粗見然
 ても淨瑠璃ノ語り狂言に脚色て世の人よく知處なれ共多く男女
 の痴情を説れみ毫も風教を裨補するの媒と成徒ら淫奔を
 懲憑るの器たるは過やと平日に嘆きて措ざりしに此書何人の筆
 頭よ起稿たるや知ずと雖忠信孝悌の範圍内は人情世態の万状を
 陳一讀三嘆せしむるもの豈凡骨俗腸なる余輩の拙著と日を同字
 一て論ず可んや之に加るに新圖の挿画を撰び印刷校正を鮮明よ
 一裁を美に爲たるハ謂つ可し柳の枝は花を咲せ梅の香ひを添
 たる如しと余勸懲の意を味ひ大い趣向を變たるを悦び板元の
 索を機會敢て一言を贅し以て巻端を汚す事とは成ぬ

明治十八年十月

銀街處士

柳葉亭繁彦





夕霧郭文章目録

- 筒井直宿助花親遊興の事并御園姫を見初る事
- 伊左衛門源八よ寄て媒酌と頼む事
- 宿直之助伊左衛門の異見に任せ媒酌となる事并伊左衛門花の井内祝言の事
- 鷲塚荒五郎直宿之助の婚姻を妨んと計る事
- 三上山歌仙の色紙を盗む事
- 櫻井中納言伊豆國へ遠流の事并桃井右京之進源八が住家へ到る事
- 源八花の井が書状を以て藤屋方へ到る事并藤屋家長偽状をもつて源八を欺く事
- 鷲塚荒五郎直宿之助と謀る事
- 筒井直宿之助癩病よよつて仁圭親子の義を絶事
- 花の井源八か住居にて男子出産の事并よ身を賣て主人を救はんことを乞ふ事
- 花の井浪花新町よ身と賣事
- 御園姫危難日金の地藏尊靈験の事
- 中納言殿親子對面の事并御園姫の孝心よ

- よりて父の病本復の事
- 花の井夕霧と改め伊左衛門に逢ふ事
- 夕霧伊左衛門身に上を語る事
- 源八角力取と成雷電と名乗事并藤屋伊左衛門居續して放蕩よ成事
- 鷲塚荒五郎夕霧よ懸想する事并伊左衛門勘當を受る事
- 源八か母娘難小兒を連て浪花へ到る事
- 夕霧伊太郎よ黄金を與ふる事并三上山老姥を殺す事
- 阿波大盡伊太郎を賣て夕霧を口説事
- 油かけ地藏の由來
- 鷲塚荒五郎勘當を受角力取と成事
- 筒井直宿之助伊左衛門よ出會事
- 御園姫操を立る事并直宿之助癩疾平愈の事
- 雷電源八高屋橋よて母の仇を復する事
- 八十島吉平伊豆國へ赴く事并中納言殿御歸洛宿直之助御園姫婚姻の事

夕霧郭文章畢

夕霧郭文章

○筒井直宿助花親遊興の事 并御園姫を見初る事
 元弘の乱れより足利尊氏將軍世を治め給てより國々の蜂起止事なく都は暫く靜謐なりと雖も西國の大友菊池毛利龍藏寺各々威を争うひ諸國に合戦止むときなく爰よ大和河内の國守よ筒井伊勢守と云ふ人ありしけるが世々將軍よ隨ひ忠勤無二の者なれば君の御覺ねも目出度日子思直宿之助の心を感なれども絶世の美男にて縁の前髪いと氣高く面ハ美玉の如く一度此小童と見て心を動さる人なきほどなれば將軍義輝公殊に御寵愛ありて韓雲孟龍の涉契り淺からず出頭並ぶ者もなく爰に又浪花の富家藤屋伊左衛門と云へる者有筒井家の館入りりて諸事を賄ひけるよよつて金銀に不足なければ衣服大小の美目を驚かす事ともなり此藤屋伊左衛門の去ぬる秋の頃亡かり後家にて悴伊太郎十七歳なるを元服させ伊左衛門と号らせ諸事家督の事の家長忠左衛門に任せ自分ハ花美を好み茶湯香道をのみ樂み是も浪花よ稀なる美男ありければ心よ思ふやう世よ類ひなき美女を妻にせんとは是のみ佛神よ祈も居けるけ此程上京して筒井直宿之助殿へ横嫌を伺ひけるに能ころ來たれ頃ハ彌生の初め都

の花も今暫くせば盛なるべし逗留して櫻符せよ我も將軍も暇を願ひて名所の花を尋ねんと
 切に留らるれば伊左衛門も風流なる男なれば心浮れ何れ彦意も随ひ奉つらんと暫く逗留し
 て在けるゆゑ直宿之助の將軍も櫻符の事と願ひければ義輝公笑ひせ給ひてこの風流の願ひな
 り都の花を残りなく見てこよと許し給へば直宿之助難有りと彦諸中上夫より藤屋伊左衛門
 よ若黨一人仲間一人は行厨を持せ祇園清水邊りの花を見廻り黒谷の邊りまで浮れ歩行一
 日も早暮昏なれば其日の歸館あり翌日の彦室より清瀧嵐山の邊りを詠めんと朝疾より小筒
 提重など用意して彦室に到り風景能所に幕打廻し花の宴を始りける此方の櫻の木蔭は是も
 幕打廻し琴の音聲最優美く梁の塵も拂ふ計りの妙聲にて「春の彌生の曙に四方の山邊を詠
 れば花盛かもまら雲の懸らぬ峯こそなかりける」と慈鎮の作の今様を謠ふ聲誠は迦陵頻伽
 も是にの争で及ぶべきと直宿之助も暫くの物をも云で聞とれし然にても如何成人ぞ心憎
 一伊左衛門見て参れとありけるよ畏つて其方の幕も立寄便りを求めて聞んと其邊りを道途
 するよ一人の大男下戸と見ぬて酒に堪ず幕の外へ立出ると伊左衛門近く立寄り是の如何成
 彦方の彦遊覽もゆやと問ければ彼大男會釋して是の櫻井中納言殿の息女彦園姫と申すは

が花見に参られしなり彦尋ね其元方の貴紳き方々と見受ゆ彦明しゆへと云よ然ばこなた
 の大和河内の大主筒井伊勢守の子息よてゆ扱々今日の塵かよて一入の彦慰みゆゆんと互
 ひよ心易く若芝打敷物語る中源八の何處へ行しや早く來れと幕押明て出る人を見れば年の
 頃は十五六と見ぬて窈窕たる粧ひの嬋妍なる美女なりしうは伊左衛門の一目見るより魂
 天外へ飛忙然として現心よ詠め居たり此方の婦人も伊左衛門を見て憎からぬ風情よて尻
 目よ見つゝ源八早く來れと云ひ捨て幕の中に入りければ伊左衛門の翹々心浮れ早くも此方
 の幕れ中へ歸り先程れ琴の音は櫻井中納言殿の彦息女彦園姫と申すは承まをりゆと申すは
 ば直宿之助殿も愈々とをめきて其姫の姿と一目見まほし如何して能からんと早戀々の情滿
 面に顯れければ伊左衛門も最前の娘に深く執心あれば何とぞいたし彼の姫を彦遊覽に入れゆ
 はんと云つゝ幕と立出先も物語りし大男出でよりと又々其あたりを立廻るよ彼男短冊を
 持立出てかな此方と見廻りふり能枝も付けるを見て伊左衛門は走り寄り卒爾の申す事ゆへ
 共其彦短冊は姫君の遊ばされ彦詠歌にやと問ひければ大男答へていや然やうにてはゆは
 ず最前幕外へ下郎を尋ねに出られ櫻井殿の雜所桃井右京之進の娘花の井といふ人の詠歌

にて則ち下郎が主人よては最前御覽の通り器量もよく又手跡も見事よひはすやと少し主人を自慢の心にて短冊を見するよ伊左衛門いと必浮れ付たる短冊を見るよ

淺からず思ひそめても花ならぬ心の色はとふ人もな

と花に寄て戀の心もあれば扱は最前の尻目遣ひは某に心あるよや男の情はうくあるものとと思ふ折から幕の内に多くの女中を聲して只今花井どの、短冊は御前様へ御覽よ入れもせず花に付る事やある源八早く其短冊を御前へ持來られよと云に花井の聲として恥しき腰折争で御前の御覽に入れんゆるし給へと我を忘れて幕の外へ駈出で短冊を取んとするに姫君の聲と思しく花井に其短冊とらすな早く持來れと宣ふうち多くの女中ばらりと幕の外へ駈出短冊を取んとするに大男の結び付し短冊なれば女の手の届くべくもあらずあれよあれと右往左往に奪ひとらん取られじとせり合けるゆゑ姫君も思はず幕の外へ出給へば彼大男は恐れありと方へに平伏す直宿之助此は能折なりとこなたの幕より出て見給ふに其姿 誠よ此世の人とも思れず唐土の楊貴妃西施といふとも争で此人よ増るべきと思はず近くと歩行より給へば姫もゆくりなく貞を見合せ給ふよ當時都廣しといへとも此直宿之

助に並ぶ人なき男ぶりなれば姫も目がれせず打詠めあり美しの少年やと互ひに思ひ初しよそ深き縁しの始めなりと後にぞ思ひいられける附隨ふ婢女ども、思はず直宿之助よ見とれ知册の事は餘所になし目引袖引咄き合けるが彼の幕のうちより聲して姫君はいたなく幕外へ出給と事なかれ早く御入りあれといふ聲は是誰ならん花井が父桃井右京之進なり此詞よ驚き皆々幕の中へ入りけるにぞ直宿之助伊左衛門は掌中の珠と龍宮へ取れしおも、ちにて忙然とぞみけるが直宿之助伊左衛門にいへらく汝いかよもして櫻井家け云ひ入れ彼姫を我婦妻よ貰ひ呉よ此婦人ならでは一生外れ女にたまひゆじと思ひ込たる躰なれば伊左衛門も彼花井よ深く執心しければ御心易かれ君は大和河内の大守なれば櫻井家の御君とならふん争で違背あるべき先々今日は御歸館あれと餘波おしげに幕の中を見入りて黄昏ころに歸りける

○伊左衛門源八に寄て媒妁を頼む事

扱も藤屋伊左衛門は御室の櫻狩りに花の井を見初より御目先に立添て忘る、隙もなかりける直宿之助殿も同じく御園姫に戀こがれて寢食をも忘れ給ひ早く媒妁をせよと切に實給

ひければ伊左衛門燕々思ふよ今櫻井家よ便可通傳とてもあらす如何ばやと心を碎しが花見
 折から詞をかけ一夫は難所桃井家の家來といひしは僥倖なと是より便りて先我戀の媒妁
 と頼み若殿の婚姻は此手より取持さば必ず成就すべしと日々櫻井家の門前を窺ひ一彼大
 男源八を所用ありて門前へ出づるを伊左衛門呼び留めて足下は見忘れ給ふか先日伊室の花
 見よ面會せしものなり少く足下に逢顔みたり事ありて日々此あたりを徘徊せしよ幸ひの折
 からなり伊室とらすまじ少の間我よ隠ひ此方へ來たられよといふよ源八も如何成事と
 は知らぬとも然らばは供申さんといふけるよ伊左衛門は源八を近きあたりの酒屋に伴
 ひ酒肴を出させ饗應しけるゆゑ源八一圓合点ゆかず足下新酒肴を出だし某志を饗應し給ふ
 いはれなま早く伊室の一條を承まはりて其後伊室走にも預らんと辭退して酒をさへ吞ね
 伊左衛門を潜め賑々伊室に思すらん某志事は浪花にて少くは人も知りたる藤屋伊左
 衛門と申者なり先頃伊室よて御咄し申せし筒井家の若殿其伊室の姫君を見初給ひ何とぞ嫁
 君よ貰ひたき願ひなり表立ての媒妁の當時京家の仁木細川の人々よても頼むべきなれども
 内分にて中納言源御承引の上よて縁邊の沙汰に及び度幸ひ足下の執權桃井右京之進殿の御

家來なるよし伊室お付内分の事を伊室頼みや度夫ゆゑ日々貴公を相待まど語りければ大男大
 いよ驚き是は思ひも寄ぬ伊室事なり勿々内分たりとも下郎如きの中出すべき事よあらす其儀
 は眞平御免下さるべしと受引ねば伊左衛門重ねて縁の事は宿世の縁しなれば勿々人力の及
 ぶ事よあらす只々足下の主君へ伊室下さるゝまでの事よて強ち足下の媒酌と申よてはな
 くゆと事を分て頼みければ主人よ咄す事はいと易き事ながら下郎の詞を争で主人が取用ひ
 中べきやといひければ伊左衛門を密めて實は足下を伊室頼みやたきとは先日右京之進殿の
 伊室女を恥かし事ながら某一不計見初てより戀の病ひよ伏沈むばかりよゆ右京之進殿の
 伊室女を町人風情の伊左衛門が婦妻よ中受ん事と思ひも寄ぬ儀よゆへともせめては我心の
 誠と伊室女よ伊室傳へ下されなば生々世々の伊室と眞實満面よ願ひれて云ければ源八も其儀
 りならざるを察しげん誠よ戀の心の外とやらん承まはりし町人風情と仰せられゆへとも當
 時浪花よて一二を争ふ家來諸國よても響き渡りし伊室名家小身の右京之進殿とが智君よは過
 ものよゆへもと實よ伊室女を伊室頼みなると思し召ならば下郎主人へいかやうとも執成すべ
 けれど足下の兩親を始め親類などの思わくも如何なりと云ければ伊左衛門朝よ悦び此儀伊

承知下さらば國元の母親類たりとも筋目正しき桃井殿の息女いかで違背致すべき其段は兼し受合ゆといふに源八も悦び然らば歸りて主人より其段中聞せ明日よても返事やべし其段は兼所は何國にたはしゆにやと問ひければ伊左衛門も悦び筒井家の屋敷よて藤屋伊左衛門と誘尋ね下されゆへと夫より互ひ酒酌交し双方へこそ別れける

○宿直之助伊左衛門の異見に任せ媒酌となる事 伊左衛門花の井内祝言の事

伊左衛門はいち早く筒井の屋敷に歸りければ宿直之助殿待うけ首尾ハ何如ぞと尋給ふに伊左衛門聲とひそめ幸ひ今日先日の下郎よ出會ひ婚姻の事申出けるに此下郎存の外義強き者よて櫻井家筒井家の縁談勿々下郎が口先よ中も恐ありと受引ずゆゆえ手を替斯様くよ中相頼みゆ所夫ハ似合の縁談随分世話中べしとやうく聞入國元の母親類の事までも念を入れて尋ゆゆえ某一受合置中恐ながら誘媒灼なざるよ一仰下されゆゆに頼上事成中べし此儀成就いたしゆゆに其縁を以て殿の縁組ハ私一方寸の中にゆと謀計よ戀を取交て申上げれば若殿の大悦び是ハ能謀計なり汝が婚禮の事國元へ申遣しなといふも事もあらん左ある時よハ我戀も叶はされば國元へは沙汰なく某一と汝と心を合せ先汝が婚禮を

急へしと戀にハ思慮なく言合せ返事遅しと待れける源八は桃井の家より歸り右京之進ケ前に出て伊左衛門が語りし事どもと述今浪花は藤屋伊左衛門と申てハ一二の家家おゆへは縁談ありて然るべきか賤き身分にはゆへとも内証にて不義の取持は仕つらず夫婦は人の大倫とやらん承まはりゆへは篤と誘勘考あそばされ然らんかど道理止しく述けるよぞ右京之進も暫く沈吟してありけるが如何にも汝が申如く主人櫻井殿初め我々まで因縁の公家侍士浪花の家家へ縁組せんは願ふ所なれども若輩の伊左衛門一人の丁簡にては遣し難し浪花の親井に親類までも得心ならハ娘を遣えさんとありければ源八も悦び夫も昨日も異々詞を語置いへども仰せの通り浪花へかけ合の上縁談肝要の候先々明日は筒井の屋敷へ参り伊左衛門が様子篤と聞合せ其上下郎が了簡よ宜しき筋と存じ候は返事仕り罷歸り候はんと翌日筒井の屋敷へ行藤屋伊左衛門を尋ぬるよ勿々重き暮にて若殿の御次を居間となしてあるゆえ容易に對面叶ひ難しといふよ源八彌よ安堵し扱は世にいふ山部などにてはあらずと櫻井中納言家より沙對談や度事ありて下郎源八と申者参りいと云傳へ給はれといふに其趣きを通すれば伊左衛門悦び彼大男來るは定めて言左右にて候はん方一國元の母親類の事申出

斜紅



一なば殿直お汚詞を下され汚熨灼下さる様になー下され候は、下郎彌よ得仕つらんと示
 し合せ源八と一間に通ずに京家の屋敷といへとも大和河内兩國の大守の住居なれば普盡一
 美盡一金銀の襖疊の結構源八大よ驚き人間の住居なるか仙境にや入けんとおづ／＼案内よ
 つれて來れば伊左衛門も美服を着し立出られ能ふる尋ね參られたりと兼て言付附と懸應目
 を驚らす計りなれば源八を憫れ果ては斯る懸應預るべき下郎に候は申昨日の汚物語り主
 人右京之進へ申候所ふつ、かなる娘を御所望添けなくまかえ遠路を隔れば御親類方の思
 し召一應にては承知致しがたく再應國元へ御懸合上皆々御得心ならば進上申べき旨返答
 申され候と述べれば伊左衛門の愛なりと嘆きするに兼て相國と思し奥の襖をさつと開け
 ば上段に直宿之助殿近習小性四方守謙威儀嚴重見ゆければ源八仰天して逃出んとする
 と直宿之助殿おれ引とめよと仰せの下より近習の者する／＼と立寄り源八を引留御要意の
 るぞといふよ彌よ恐れ入り躡まりて居ければ直宿之助殿源八よ向はれ詞正しく其は桃井
 右京之進が僕とや藤屋伊左衛門專代々此方へ出入の町人よて由緒正しき者なり此度右京
 之進娘と婚姻の事相聞しよ今日返事よ浪花表親類得心なれば縁談取組んとあれと筒井直

宿之助始約を致し遣り上げ争で母親類まで否と言ん浪花へ引取の双方の支度延引せん先々
 急に内祝言なして安堵せよと言捨て其儘襖を押しければ源八ハ只夢の心地して直宿之助殿
 の容貌言語の爽かなるに恐れ入てありしが漸く人心地付て大に悦びかく筒井家の若殿御媒
 灼あるとせ世に稀なる事なり中納言殿は難所如きの本望此上やあるべき内御祝言の事近
 々下郎ヶ計ひ申さんと勇み進んで立歸り右京之進と語り筒井の若殿直宿之助殿の世
 よ希なる器量を稱しあられ中納言餘の姫君御縁談あらば此上もなき事と事に擬て流ければ
 右京之進は悦び一勝守町人なれども諸國に聞ゆし藤屋伊左衛門其上筒井の若殿媒酌下さる
 とは此上やあるべき中納言殿も此趣を相願早々内祝言せさんと中納言吉卿の御前より出
 姉花の井浪花の町人藤屋伊左衛門と申者一縁談什つり理旨申すければ中納言殿を兼て聞
 及び給ふ伊左衛門あれば宜しき事と思し召殊に筒井家の若殿媒酌とは嘸大慶なるしべ然る
 一筒井の屋敷に勤番屋敷なれば女一人も有ざれば内祝言の事ハ丸山端の察にて然るべしと
 お差圖ありけるより其趣を筒井家中に遣はしけるよぞ然ればとて結納目と驚かず計よ
 積重ね筒井家の近習正木主膳を右京之進方へ遣はしければ分て源八にハ格別の骨折とて黄

金十枚遣ハ一けれと源八膽を潰し争で此大金を受納致すべきと種々辭退すと雖も使者是を
 免さず右京之進も受納むべき旨申されけるゆる頂戴して千本に住ける一人の母も見せ悦
 ばせ申んど候るべ事限りな一夫より丸山端の察よて内祝言の式あるしと事極りければ直
 宿之助殿より又々正木主膳を饗應の役人となし遣しける右京之進は娘花の井を召つれ源八
 諸とも入來れば藤屋伊左衛門愛を曠と着飾り出向ひけるよ娘花の井も御室の櫻狩りみ見初
 一美男なれば心嬉しく互ひよ親子夫婦の盃と取交しける其時伊左衛門右京之進より向ひ斯親
 子となり侍るも深き縁縁よて侍らん夫よ付舅殿も親み入度仔細は筒井の若殿去ぬる御室の
 花見の折から筒井家の姫君を見初給ひ何卒嫁君よ中受度願ひなり當是將軍家の浮見ぬもめ
 てたき直宿之助殿なれば表立ての媒灼ハ細川家或ハ仁木など傍望み次第になりやべし内證
 の所を何分ハ執成頼み奉つるとのべければ右京之進打點き先にも其贈贈さるよもあらず大
 和河内の大守を響とし給ふハ主人も満足ならん此事は某し宜しく計ふべしと受引て源八を
 送し其身ハ歸りける伊左衛門ハ斯思ふ儘よなる事此上やあるべきと園中より入て花の井と對
 面し頃日より戀々の情を述ければ花の井も恥かしく貞赤らめて自らも君を見初て靜心な

く櫻は短冊を附しを君の見給ふ時の嬉しき夫より姫君の短冊とどれよと宣ひて幕の外へ出給ふも筒井家と深き縁にてや侍らん此心を必ず替り給ふなど互ひに千代八千代と語りひけるに情知ぬ鳥の鳴音も源八早くも起出て伊左衛門様御歸坂候へ早送迎ひの興を登せ給ふべし先夫までへ暫くの間なれば早々御歸り候て姫君も筒井家御興入を勤め給ふこそ忠義候へんと俱を揃ゆるも名残の盡せぬとも漸々よして花の井は駕よ打乗御りければ伊左衛門は筒井の屋敷へ歸り夕よりの始末を語り櫻井家御婚姻の事舅右京之進も中候へば大に悦び俱々中納言殿へ勸申へきよし中歸り候上は御心易く思召し下さるべしと云に直宿之助殿も悦び給ひ然らば内々將軍へも申上表向より言入べしと悦び給へば伊左衛門は不思議の事にて浪花へも言やらず妻を求めけるが此末如何なりけん下回をよみ得て知るべし

○驚塚荒五郎直宿之助の婚姻を妨んと計る事

桃井右京之進は邸へ立歸り櫻井殿の御前より出娘の内祝言の濟し事を申上且伊左衛門が言し直宿之助殿姫君婚姻の事を申出し筒井家へ和州河州兩國の大守殊も直宿之助殿將軍の御愛淺からぬば誠願ふてもなき御縁談と存じ奉つると言ければ中納言殿如何も汝が申如

く我等が御にえ過たる家柄なれど爰も一ツ難義の事あり去年より阿波の大守驚塚大膳の子荒五郎といふ人より娘所望のよ一度々言入るれども彼荒五郎は身指宜しからず傾城に心を寄殊更心奸佞にして放蕩不頼の男と聞ゆるゆゑ有無の返事もなす捨置たり此事の苦心も懸るとありければ右京之進打笑ひ假令御約束候とも納結を取ざれば世も中約束御替常の如くと承知る矧や有無の御返答なきよ於てハ心易く筒井家へ縁談相整ひ候上ハ残念ながら御断り申と一通り仰せられ事濟候儀といと心易く受合ければ中納言殿も安堵し給ひ某近頃痴癪の病よて歩行自由ならず參内さへせざれば汝諸事を計ふべしと右京之進も任せ給ふ扱又花の井は不思議の縁にて思ふ男と婚禮して心易く嬉しくいち早く姫の御前へ出れば姫嬢女ども夕は嘸々嬉しからんあやかり者とてんでに寄るひ耳を引もあり様もありければ花の井ハ恥かしくも又嬉しく姫君に直宿之助様御婚儀の事親右京之進受合候上ハ定めて近き御興入あらん都廣しと雖も直宿様も増器量はなきよし姫君こそあやかり物も候といふも姫も花見の折から見給ふ美少年なれば心易く嬉しく只真に紅葉し給ふ計なり抑々此姫君ハ母上産後も空しくなり給ひ其後は中納言殿寡夫住も暮し給ふ又花の井が母も産後も死しけれ

共右京之進後妻を迎へず暮しける故姫と花の井との兄弟の如く浮殿のみの居て成長せしなり
 愛し阿波の大守鷹塚大膳といへる人あり奸曲邪智よしして當時松永彈正の娼婦に其子荒五
 郎廣輔を在京させ將軍の御近習たりしが此荒五郎好色男よて在番の徒然九條の傾城よ金
 銀を遣ひ捨其上大酒不頼の悪漢なり櫻井中納言の息女を都よ希なる器量と聞傳へ人と以て
 婚姻の事と言入けるよ中納言殿其行跡の正しあらざるを悪んで有無の返答もせず打過給ふ
 よ今度筒井家へ縁談あるに付て右京之進は荒五郎が屋敷へ立越先達てより度々主君の姫君
 御所望の御使者に預ると雖も取紛れ御返事さへ致さず候所此度筒井家より所望に付是へ差
 遣のす問餘儀なく御断り申と言留て歸りければ荒五郎大に怒り憎き安公家哉去年より言入
 たる某よ返答さへせず其上大和河内兩國の大守たる筒井なれば某よ提議へあの方へ遣
 す事言語同断なり此意恨晴さで置べきかと躍り上りし怒りける然さも得心の上懸奉とい
 ふも有す何言とやるべき術もなければ獨り心を悩しけるが急度心よ一計を生じけるこそ
 恐しけれ荒五郎元來角力を好み力者と抱へ置けるが此者は江州甲賀郡の産よて三上山百々
 右衛門といへる六尺有餘の角力取よて甲賀忍の家より出て忍術よも達し角力の日本よ隠な

さ力者よそありける此百々右衛門を密に招き櫻井家より婚約替の事を憤はり是れ付汝に
 頼みたき一條あり斯様くよな一吳なば一藤蓑美せんと有ければ類を以て集る惡黨なれば
 二言と育す受合某よ關取と尊敬せられ其術のうち捨候へとも御頼みとある上は二度術を行
 ひ首尾致す事え我方寸よ候一世一度の曠業よ候へば仕課候へ急度御蓑美下さるべしと詞
 とうため其支度をぞあしよける

○三上山歌仙の色紙を盗む事

禮記よ曰國家將お亡びんとするるときに必ず妖孽有と宣成哉抑々此櫻井中納言の家系を尋ぬ
 るよ大納言公任卿の末孫よて世々公任卿の選ひ給ひし自筆の三十六歌仙の色紙を所持し給
 ふ代々の天子獻覽あり分て後醍醐天皇櫻井家へ預け給ひ必ず御位定まりて後政覽あるによ
 り櫻井の家の重宝此上なき物なり頃ハ水無月初めつかた彼色紙由子をなし給ふよも自ら是
 を守り怠慢なくおはしけるが最早黄昏頃なれを悉皆く改め三十六葉一ツよなし箱よ納給ふ
 所よいづくより來りけん七尺計りの眞黒なる者庭の植込よりのさく座敷に上り彼色紙
 の箱を奪ひ取又庭の方へ行んとする故中納言殿大驚きこの曲物逃すまじと傍らなる太刀

を引抜給へども疵癢よて迅速に立事叶へねば其太刀を投付給ひしに肩先よはたと當り鮮血
 流るゝと雖も見返りもせず何國ともなく消失ければ中納言殿一大事ぞ物ども來れど宣ふに
 ぞお次よ打へ近習折節右京之進も詰合居ければ早速駈付此体を見て上を下へと返しけり
 心利たる本京之進追取刀よて裏門へ駈行けるがはや半町計り先へ六尺餘の男かけ行ゆ是
 なん曲者ならんと電光の如く追行しが形を消てうせけるゆゑ其事と早速天聽に達しければ
 帝甚だ逆鱗まゝく一切の責なればこそ南帝都落の砌大切よせよと預給ひ加之ならず代
 々の帝御即位の砌り櫻井家より敵愾あり舊格たるを容易に盜まれしむと、ハ言語道斷不届
 なりと公卿詮議ありて中納言殿に館と青竹にて戸締一間所よ押込嚴敷番をぞ附られける斯
 る事とハ知らず直宿之助殿ハ婚姻を取急んと將軍へ歸國を願ひ伊左衛門を召連大和へ歸り
 給ひて櫻井中納言殿婚姻の事を父伊勢守殿願ひければ伊勢守も大に悦び某多病にして
 大國を治るよ心勞せり直宿之助將軍の御覺えも目出たく婚禮を願ふ事此上もなき悦びなり
 早く元服して汝を伊勢守となし我ハ法鉢し仁主と名乗るべと將軍家へ家督の願ひを出し
 櫻井中納言へ結納を持參するよ青竹よて戸をノ勿々出入さへ叶へねば大和の使者仰天して

あたり近き公卿へ立寄仔細を聞に色紙紛失の御咎なりとの事なれば惘れ果て歸國一右の趣
 きを述ければ直宿之助殿伊左衛門が驚き大方ならず如何せんと相談するよ父伊勢守ハさあ
 らぬ鉢よて斯る罪人の娘を嫁になしては家の名折結納を遣はさるころ返すくも大慶な
 れと自若としておはせば直宿之助ハ只涙に沈み更に元服の心ざもなくおはしける故伊左
 衛門も一先京都へ寸越皇本京之進も面會一事の實否をも尋んと云ふ斯る大變なれハ容易に
 門内へ入事もなるまじ様子分りて後寸越も暫く我傍らも在て心とも慰めよ便にするハ汝一
 人なりと免し給へねハ伊左衛門も必ならず思へども若殿の心をも推量り暫く大和に逗留し
 ける

○櫻井中納言伊豆國へ遠流の事 櫻井右京之進源八が住家へ到る事

斯て櫻井中納言殿ハ大切の寶紛失せし咎より舞家公卿評議ありて伊豆國熱海へ遠流極
 り怪一の張輿を昇荷ひ捨非違使の官人中納言の館も來り咎の趣きと述引立れば御國姫は只
 夢れ心地えて父の卿に取すがり何逆遙くの所殊も歩行も不自由も渡らせ給ふ御身を獨放ち
 て遺參らせん自をも召連給へと正鉢なく歎き給へハ官人も心有人よて左歎給ふな實さへ尋

出し給は、歸浴は疑ひ無べ。此上は跡は残り右京之進と心をいせ寶の詮議なし給へ罪人の
 妻子と俱して行法なれば供叶ひ侍らす品より跡より來り給ふとも夫は公けの私志なら
 ん島守も某し内々言聞す知す顔よせよといはん此度の帝の遊戯甚だしければ却て中納言
 殿の爲になるやと事を分ていふ中納言殿も斯る災ひは逢も天のなせる事にて人力及
 ぶべきこととあらず右京之進を呼出我不幸よして遠流の身となる事誰をか恨みん只姫の
 事を頼み入二ツよは色紙の盜賊を尋出し再び我家を起し吳よ返すくも短氣を出す事なか
 れと張興よ召るれば右京之進の張裂ばかりの胸を押解め斯なる事誠よ申上べう詞な一併一
 跡の事必ずく御氣遣ひ候まじ分骨碎身して御家再興を計申べ一併一御病氣の我君是のみ
 心を痛候と言もあへず咽かへれば姫は猶更争で父上計遣參らせんと狂氣の如く見給へば
 花の井猶女心の正躰なく姫君こそ御供は叶すとも切て奴家を召運られ御介抱申上たしと只
 管に願と躰も官人開入す其事を重て如何様ともなるべし心弱くて叶ふまじと姫花の井を押
 のげ中納言を興にかき乘伊豆を差てそ急ける即刻追立の官人數多來り櫻井の屋敷を追拂け
 れば右京之進泣々從者婢女どもも一暇を遣一門外へ立出けるが何國へ行んと途方よ暮けるを

源八甲斐く下郎が母は在所千本通り幽暮し候先は是へ御越候へと花の井の姫
 君の御手を引右京之進も少一の願呂敷包を脊負強力の源八姫の調度までを引かたけ千本の
 母が方へ到れば母は且悦び且歎き能こそ御尋下されし斯る事のありされば争で姫君の住荒
 たる宿へ來り給へんと眞實よりうづさける姫君は只管父の卿の歩行不自由を歎き給ひ配所
 へ寸越介抱せんと頻に宣ふにそ右京之進其孝心を感じ俱に御供申さんと思へとも即刻屋
 敷と追拂はれ一事なれり貯へともあらず配所の御不自由なきやうよ金子をも持參し御介
 抱せけやと思へとも是ととも心に任せず是のみ心を痛ければ花の井いひけるは奴家浪花の
 藤屋伊左衛門殿と婚禮して未だ彼地へは行ねども夫婦の約束な一たる上は此節百兩二百兩
 の事頼み遣はずとも難み給ふまじ此頃は伊左衛門殿も若殿の御供して大和へ行との多を殘
 一給へは最早浪花へ歸り給ふらん櫻井家の騒動をも知せ金の事と頼み遣へさん如何にと
 云よ右京之進暫く沈吟してありけるが僅百兩ばかりの事を浪花一の豪家へ無心をいふ事口
 惜殊も其方披露も未だせざる事なれば如何あらんといふと源八聞もあへず夫へ世よ有と
 の事候斯る時節に何ぞ義理と立給ふ事ある某し花の井隣の御多を持行伊左衛門様よ面會

て御家の事を咄しなは百金二百金の事争で遺背し給ふべき事認め給ふ某し立越配所の御賄ひ心の儘になし参らせんと事もなげよ述ければ右京之進も口惜との思へども姫の頼み父上を慕ひ給ふに詮方なく娘よふみを書せ源八と浪花へ遣しける

○源八花の井が書状と以て藤屋方へ到る事 藤屋家長偽状をもつて源八を欺く事

源八心せく儘伏見より船に打乗夜明よの浪花へ着べし乗合の中よ入けるに先よも一人源八お劣らぬ大男打乗居たりしが源八を熟と見て足下は誠か能男ぶりなり角力を取給ふやと尋ければ源八打笑ひ幼少より公家奉公仕つり力業の致さす候へども元來角力は好物よてすこしは心懸申といふよ左あるべし某一は浪花の角力取八十島吉平と申者頃日迄京都よ勘進角力ありて逗留いたし漸く今日國元へ歸り候扱々能男天晴天下の闘取よなり給ふべし物相談候か公家奉公を止め向後角力取よなり給ひて恐らく日本の大闘となり給んと勸るといへども源八は主家の難儀よ心ひかれ能程よ待遇けるよ八十島へ頼りよ源八を勤め我所書を認め渡し必ず尋ね給へど咄の中早くも八軒屋といふ所へ船の付けられ己がさよとくに別れける是より源八は藤屋伊左衛門を尋ねるに浪花一二の家家なれば早速えれ門よ

り其様子を窺ふに聞し増る家居の結構なれば頼々心嬉しく店よ立寄京都御井家の雑所桃井右京之進が家來源八と申者よては源八主人伊左衛門様よ対面し咄し申度儀ありて参り候し取次下さるべし則ち嫁花の井殿よりのゆふみよてはと差出せば暫く待候へと言捨下り雅の多をもて奥入り此時伊左衛門の未だ大和み在て留守なれば家長忠左衛門母妙閑よひけるの先日伊左衛門様よのゆ状よ筒井家の若殿ゆ蝶約よて櫻井家の雜所桃井右京之進の娘花の井と内祝言せよし歸り次第吉日を撰び京都より呼向んとの事なれども此方よハ已に梅屋久兵衛殿妹ゆと嫁し貫はん互よ似合の事なりとた袋へ兼て仰られよ相談もなく内祝言有しとの餘り諸親類方と踏付よあされし事なりと評議いたし居ゆ中へ最早嫁花の井よりの多など、の扱々憎き致方なり先々多を開てゆ覽あるべしと母妙閑諸とも多を開くよ櫻井中納言殿は伊豆國へ左遷屋敷ハ召上られ漸く家來源八が母の方よ在よし姫君伊豆の國へ介抱ゆ出あり度よ一我父ゆ供よて行かんよも旅用且配所の賄ひよても有ざれば金二百兩計りゆ貸下さるべし妾事ハ一日も早く其ゆ方へ参りたればゆ供よのはづれゆ迎ひを待暮すとの文牒なれば母家長大お驚きこはけしからぬ事哉斯る家もな死人を嫁し買ひて何かせ

ん早く縁を切には如じと様々工夫と凝しけるが忠左衛門不計心付旦那伊左衛門様留守こそ幸ひ此返事を似せ筆に認めあいうをつかし重て此方へ便らざる様の仕方ころあれと手代清八は旦那と一緒寺屋へ行旦那の手跡寸分違へねば是返事を書せやさんと家長察文て手代清八に書せ家長忠左衛門其文と持出源八お對面して其元へ桃井家の御家來とや旦那伊左衛門中さるへは京都逗留の徒然に桃井の娘を慰みなり争で嫁などに貰はん委細へ返事に有との仰せなりと聞より源八仰天して夫の存じの外の事なり伊左衛門様眞實お下郎を涉頼み故此婚禮の事に付様々心を盡し取持えの能御存じの事何もせよ伊左衛門様よ目目に懸り涉咄し中せば相分る事旦那を涉出し下されよと急よ急て言ければ忠左衛門嘲笑ひ此方の旦那の容易に其許方の如き下郎逢人にあらす早く歸り給へと聲荒らかよ罵るよ源八の只夢の心地して様々と伊左衛門に而會せん事を頼みければ多くの手代ども一同に終る源八を門外へ追出しけるゆえ源八逐方に暮て居たりしがいや伊左衛門殿表向婚禮なき事なれば家内を懼りて斯情なく言せ給ならんと道理と付てすくくと京都へ歸り浪花の始末を語り早く其返事を開き見給へといふし花の井鷲を開見るお伊左衛門が手跡にまされ

なければ返事の文体を見るに京都逗留中の徒然に和女を慰みなり此方よ桃屋久兵衛といふ人の妹小吟といふ言なづけあれば争で公家侍士如の娘を嫁よせん必ずしと思ひ切給へまいて二百兩の大金を何ゆゑ借中さんや此後多なと給るまじと書たれば花の井はアツと叫んで地お倒れ暫え絶入有けるが懐劍抜持既よ自害と見おければ人々大よ驚き押し御園姫の花の井は縄り付やよ花の井狂氣せしや心と静めよと宣へば花の井は落る涙を拭ひつゝ斯る畜生の如き人とも知す幾千代かけて契りし事の恥しさに殊に頃日ハ我身只ならぬ心にて全く伊左衛門殿の種と懐妊しなれば早く嫁入して王の如き子を産御袋様に見せばやと樂みし甲斐もななく何と世の人に面を合すべき只此まよ殺して給はれて泣叫びけるにぞ右京之進も涙にくれ暫く沈吟してありけるが某しつくくと思ふよ只一度面會しつれ共伊左衛門が人物斯る不義を行ふ者よあらす是よは深き仔細もあらん殊に此程源八が老母の介抱大勢の厄介を賄ひ呉るも皆伊左衛門が源八へ與へ黄金なり斯る不道の者何とて十枚の黄金と與へん必ず大死する事なかれと留られ少の心安まりて漸々死を止まりける

○驚塚荒五郎宿直之助を謀る事

驚塚荒五郎の櫻井中納言の婚姻縁替を深く憤り三上山を詔らひ公任公色紙を盗せ中納言家
 は咎めらんよ一年も立なば我尋ね出たる様になし櫻井家よ恩を見せ再び姫を手よ入ん中
 納言蟄居の内争で筒井へ嫁入あらん此恩を見せ筒井家を断り我方へ姫を迎んどの謀計なり
 一よ帝の逆鱗甚だしく中納言の左遷姫は行衛なくなりけるよ此も蜂も取すありけるが宿直
 の助に鼻明せしを切ても腹いせと思ひける斯て筒井家には伊勢守仁圭と名を改め入道し
 て宿直之助も元服させ伊勢守となし上京させ將軍へ家督の御禮中上させけるよ宿直之助は
 心臓々として樂まず明墓姫の事のみを戀こがれ此度の上京も伊左衛門を召つれ將軍家へ侍
 禮中上られしに義輝公御満足遊ばされ義の一字を給はり伊勢守義雄と号しければ威勢烈々
 日々増けるぞゆゑしけれ同じ近習ながら荒五郎は志し宜からざれば將軍其外もうとみ取
 用ひざれば又々筒井が御前能を憎む事日頃十倍して何とぞ彼をなき物よせんと様々工夫
 けるが或日殿中よて筒井よ云けるの足下家督彼是して祝儀をも中さず今晚幸ひ足下
 も某しも非番なれば鹿酒一献進上せん何とぞ來臨あれかといふに筒井は元來酒を嗜まざ
 れども朋輩の事辞みがかたく然らば今晚御馳走預らんと別れけるが宿直之助の屋敷に歸り

斯々の事よて荒五郎方へ招かれたれば汝も來れと伊左衛門よ言けれども伊左衛門の只花の
 井ヶ事のみ心よ懸り仰せ有難ゆへども某一の櫻井家の姫君舅右京之進が身の上何方よ住居
 致すよや此程より尋たく存ゆへども君の傍側よのみ在て心底よ任せず今日は湯殿を給はり
 姫君の在家を尋参らせんといふに宿直之助如何よも某も心よ懸りたれ共公務よ暇あらざ
 れば其儘に過せしなり汝心を込て尋参るべしと宣へば畏まりゆと伊左衛門の立出けるにぞ
 筒井の正木主膳を召連荒五郎の亭よ至れば荒五郎大に悦び能こそ來り給ひしと日頃みも似
 ず酒肴と出し忠實よ變應ける然ども宿直之助の下戸なれば亭主荒五郎のみ酒を吞今は不頼
 の躰よて座も乱るゝよ至り亭主荒五郎いひけるは筒井公の最前より一向に酒を吞給はず我
 のみ過して甚だ酩酊せり爰よ美酒あり少し吞給へと硝子よ入し酒を出しければ宿直之助も
 餘り亭主の餐應をむげよせんも本意ならずと半盃盞よ受て吞に其味美よして賊よ養老の美
 酒とも言つべし荒五郎今少いと云ひける故又半を吞けるは豈はからん是癩疾を發する毒酒
 ならんとい知ざりける夜も更けれと主膳袖を引暇を乞給へと云よ筒井も大に酩酊して又社
 参りゆへんと禮謝して歸りける其日伊左衛門は閑暇を得て櫻井の門前よ來り門内をさし覗

くよありしも似ず草々と生繁狐狸の伏所となり居ければ思はず落涙して去りても右京之進の
在家の何國よおのすやらん斯様の時こそ尋ねて人の誠を顯へす日節なりと邊り近き町家よ
入て事のやうと尋るよ追立は官人參られ姫君右京之進殿諸とも立出給ふは見受侍れど夫よ
り何國にたのすといふ事を知ず近頃承まはれば姫君右京之進殿親子とも伊豆の國へ赴き給
ふとの風聞なりと云ければ伊左衛門彌々力を落し孝心の姫君なれば左もあるべき事なり右
京之進花の井も定めて陣俱して行し疑ひなし左ある時争都のうちよあらんと力を落し
て歸りける

○筒井寄直之助癩病よよつて仁圭親子の義を絶事

夫より筒井宿直之助は宿所よ歸けるが何とやらん心地あしく翌日も出勤せずありけるよ惣
身發癩を生じ糞事一きりなれば是を撥し膿汁を出し顔色も悉皆く班となり種物の如く
とれ出来三日の中よ眉毛なども抜ければこは不思議の事なりとさましく療用を爲すと雖も
更に驗なければ將軍へ訴へ古郷へ歸りけるよ父仁圭も大に驚き是と見るよ全く癩病に違ひ
なければ仁圭歎息して我家代々癩と病ものあれば必ず親子親類まで義絶して街よ捨るの例

なり既に先祖俊徳丸を合邦が辻へ捨し例あり不便には思へども先例よ任するぞと又元の宿
直之助よな一仁圭再び伊勢入道と号し政事を治ける近習正木主膳ハ幼少より伊例よありて
厚恩忘却すべきやと捨られ宿直之助に附隨へば藤屋伊左衛門も是までの厚恩報する爲
浪花へは俱し諸醫に見せゆは争で本服なき事はゆまじひらよ浪花へは光臨下されよと
さましく諫むれども宿直之助は唯涙よ啜びいやとよ我斯る惡疾と得る事誠よ佛神の汚憎み
と思へば誰をか恨みん我是より諸國の靈佛靈社よ詣で少しも我罪の滅する様よ願はん命お
らば重て逢へし主膳を我幼少よりの好みあれば彼一人を召連んと伊左衛門種々といふと雖
も更に聞入ず伊母富の方も頃日より歎きよ沈み給へ共家の格なれば詮方なく宿直之助が望
みの如く諸國修行して痴氣平愈せば早く連歸り吳よと黄金百兩を主膳に渡しける父仁圭も
流石恩愛の涙に吳居たりまが宿直之助は先是より西國願禮せんとありけるよ伊左衛門も
て浪花迄ハ伊俱せんと三人旅の衣裳よ脱かへ笠深々と打冠り主膳甲斐くく守護し立出
れば兩親の歎きの言も更なり夫よりの大和河内の靈場に札を納め浪花へ出給へば伊左衛門
さましく留ると雖も藤屋へは立寄給はず伊左衛門引別津の國惣持寺勝尾寺へ分登給ふぞ

哀れなる是全く荒五郎か悪計も落給ふころ是非もなき

○花の井源八が住居よて男子出産の事 身と賣て主人を救へんと乞ふ事

却説御園姫の一日も早く伊豆國へ行て父の卿の介抱せんと心計りの急給へども旅の用意よ
すべき金なげけば心ならず源八が母の元よかひする中花の井は月滿て王の如き男子を産け
るが右京之進の不義の伊左衛門が種なれを氷よなせよと様々いふと雖も花の井の受引す思
ふ仔細のゆへは是計は父上の仰と背き死し給へといふよ源八も俱々小産は誠よ恐しき業な
り大切の汚身に怪我ありては立難いと親子詞を揃へて止むるに右京之進も心遣ひの中に娘
よ過ちよても有ば此上の大事なりと終に安産したりける然れども伊左衛門が源八に與へ
黄金も次第になくなり姫君は日々父の卿の事を言出し泣給へば花の井は急度心をとり直し
父の前よ出て斯いつまで此所におはすとも仕出したる事もなく老母の貯へし金も今のなく
なれば我々迄餓死するを待ばかりに侍るなり妾父上に願ひとやは自らを何とぞ傾城に賣た
まひ其金をもて姫君父上熱海へは越在て我君の汚介抱あるべし此子老母よ預け置浪花へ身
を賣んと思ふなり然あるときハ早晚伊左衛門殿よ廻り合まじき物よもありず年月の恨みと

只一言いは、死するとも本望ならん且は汚賣の詮議を諸人の入込所なれば聞出す事も侍り
ん我身一ツよて三方四方の望み達するにゆはずやと理非を正しく述ければ右京之進涙數行
よ及び涙石は我娘なるぞや能も附たま此上の二言とも云す汝が骸を親が貰ふぞと云もあ
へずさめくと泣ければ姫君是と聞給ひいやとよ花の井其方の幼き兒を振捨て行んとは心
強一父上の爲ならん自らこそ憂川竹の勤をもせん右京之進ハ其金をもて父上の介抱頼み入
と宣へば花の井の少一怒りを含み姫君と傾城となし我々親子安閑と其金を以て伊豆へ参り
我君へ何と申上ん斯る事を強て宣ふならば自らの自害まで早く此世の苦を免れんと思ひ詰
たる氣色なれば源八老母諸とも花の井の心を察し仰せ一々汚尤もなり忠孝全に汚計ひ此汚
子ハ此姓がもり寸風も引せやまじ必すく汚氣遣ひ有まじ汚賣の詮議ながら浪花へ汚越あ
るも宜しからんと源八諸とも勤ければ姫君も理に伏し泣給ふより外なかりける源八心を靜
め是まで京にのみゆひて浪花よ知音とてハあらざるれども日外藤屋へ参る折柄船中よて八
十島吉平と申角力取に近付に成所書をも與へ今よ所持致せば是に便りて新町の忌入屋へあ
り付事を頼み申さんと是より直よ浪花へ参り何れ吉左右申と立出れば花の井は最まめ

くまく必ず早く歸るべしと潔よく云て門おくりせし心のうちぞあはれなり

○花の井浪花新町よ身を賣事

扱も源八は沈む心を取直し愛を忠義の顯し所と浪花へ下り八十島吉平を尋し早速宿あり源八を見て大に悦び日外伏見の船よて面會せし源八殿にや能こそ來られいとさまく櫻應しける源八詞を改め今日參る事は貴公よ折入て涉頼み申度仔細ありて遠路と下りたりと主家の没落主人の娘身を賣て主君を東國へ遣んどの事ども落なく語りければ鬼の如死八十島始終涙も順び手拭をもて目を押拭ひくくして在けるが扱々斯る孝子もある物かハ我昇迄候客をことし頼みを引ざる氣性あり殊も源八殿の忠義感ずるは餘りあり口惜や黄金だま有ならば等で其息女を傾城よ沈ん併し心易うれ新町扇屋の旦那ハ某を最負にて角力の世々に多くの花をも給れば某しも折節參り至て心易し此人も義氣ある人よて様子を物語らば等で難面待遇し給はん暫く爰よ待給へ悪しくハ計ふまじと言捨て出付けるが稍あり立歸り足下の咄の始終を荒増よ語りし其孝心を感じ假令器量をいかやうにても各々の志ざし一は源八望みの金子を遺すべし暫く待給へ足下と同伴して京都へ至り其節金子を渡しやせ

ん追付是へ來るなりといふに源八大い悦び偏も關取の涉影なりと禮謝するうち早立派の男駕をつらせ來りて吉平殿先刻ハ涉太儀あり其人と同道して京都へ行んと其用意にて参りたりと源八を見てお咄しの方ハ此人なるか扱く能男ぶりなり今浪花よ此位の肥大の關取ハなまど賞し源八諸ども京都を差て急ぎける斯て千本通りに來り源八先へ入て是よてゆと云に寔に住荒たる家居ながら奥の方よ純子の几張をかけ五十餘の士の側に花の井の子を抱き老婆ハ茶を煎て在けるが花の井聲かけ源八首尾は如何ぞといふよ源八頓首して上首尾にて則ち迎の涉方を同道仕りゆとせせば夫ハ婿やと子を姥よ渡し立出る様を見るよ誠よ絶世の美人なれば扇屋の亭主大に驚き我是よて多くの奉公人を抱へたれ共斯る美人ハ始て抱ゆる事と心よ悦び臺所よ上りければ右京之進も立出源八云様奉公よ行給ふは此涉方去年出生の子は我母よ預給ふ程の事あてゆへば道々も申通り何卒二百兩お借下されと花の井諸ども涙ながら頼みければ扇屋は打黙き源八殿よ委細承はる上は涉尋中に反ばず涉望みの金は渡しやべし涉定りの證文成されゆへと認め置し書付を差出せば右京之進親判源八請八にて印形見届金子二百兩相渡し中と懐より取出し則ち怒も召連ゆへば名残も盡まじき早く

涉支度ゆへといふよ花の井は今更のやうお思はれ我子に伊太郎へ暇乞の乳房を與へ思ひ切
 たる心よも幼兒の貞を見れば堪へ兼て叫と伏沈は凡張の内よも姫君堪兼て轉び出花の井の
 代りよ妾を傾城ふな一くれよと泣悲み給ふを扇屋亭主是を見るよ又花の井よ増り一容色は
 れば忙れ果て居たり一が右京之進は泣目を拂ひ姫君はしたなき事を宣ふもの哉花の井は覺
 悟の前姫には伊豆にて御孝行有べき御身よゆはずや娘も今更未練なりと心を鬼よなして云
 ければ花の井の岐と心をとり直一伊太郎と老女よ渡一隨分一御擧げんよく伊豆の國へ涉
 越あらば必一涉多給はれ父上さらを姥かさなき者を頼むぞと見返りもせず駕よ打乗ける
 にぞ人々も其心よ恥て互に涙と袖よ包み暇乞ひさへなく一立出れば扇屋の亭主も驚る、
 心を取直一源八殿にハ涉大儀ながら浪花まで涉送りありて此子の落付を父涉へ仰せ上らる
 べ一といふよぞ母も心付花の井様も嘸心細く思さん源八ハ浪花迄涉供せよといふに右京之
 進も此金さへあれば一日も早々姫君の御供一伊豆へ立越ん汝ハ跡に残り老母幼き者の介
 抱を頼む伊豆への旅立は姫君某一只兩人なれば必ず供せんなどいふべららず是より娘ハ
 付添力を付よとありければ源八も身一ツありねば詮方なく然らば隨分涉擧げんよく涉出立

下郎も浪花の首尾を見届跡より參上仕つらんと怒よ引添立出れば右京之進ハ扇屋の亭主よ
 厚く禱謝して涙を隠し見送りける

○伊園姫危難日金の地藏尊靈験の事

斯て右京之進は娘花の井が忠義よより二百兩の金を得て孫伊太郎が養育金として十兩を老
 婆よ與へ置殘りを肌よ付一日も早く熟海へ急んと姫君よ市女笠ふかく冠らせ其身も笠ふり
 くと着て其翌日立出ければ姥はいと甲斐く一涙一ッこぼさで暇乞ひ一て別れければ
 右京之進も孫に引る、心を取直し心強くも立出ける夫よりは野越山赴日敷を經るよ姫君ハ
 馴ぬ旅路に足を痛給へハ多くの駕よて漸々伊豆の國三島の驛よぞ若みける此御園姫幼少の
 頃より地藏尊を信仰し給ふに花の井も諸とも明暮地藏經を誦一信心怠る事なかり一が分て
 道中恙なく父の卿に逢せたび給へと道すづら片時も忘る、事なく六道能化の御佛を祈りけ
 る殊よ三島の宿めて廿四日なればいか成菓子にても供じ奉つらんと其邊を尋けるよ小豆の
 入一餅を三ツ宿の女買求め來りければ姫ハ斯るいふせき物を初めて見給ひ斯様の物を佛
 に備る物よやと右京之進も打涙ぐみて御佛ハ見通しどころ承まはりて以以前備へし珍味珍

膳より其かちんころ納受ま給ふらんと紙打敷て備へ夜も更ゆへば汚休ゆへア、櫻井中納言ともいれ給ふ人の姫君の斯まで落ぶれ給ふ事のいたはしきよと男泣き泣ければ姫は猶更花の井が専兄弟同前より片時も傍を離れず暮らせしにうき川竹お身を沈め多く人よ枕と交す事嘆や苦しく思らんと泣伏給へば右京之進心を取直し扱へ云甲斐なき事を仰ける物哉明日のばや兼海へ御着ゆて父の卿よ久々よての汚對面よゆはすや悦び給へと勇めす姫諸ともよ枕を傾け伏けるいと哀れなり志事ともなり此隣座敷に三上山百々右衛門銀倉の角方の歸り弟子角力四人召つれ泊りしが最前より右京之進が咄しを聞大よ悦び兼塚荒五郎殿の心を懸られ御園姫なるべ一我色紙を盗し此姫を手に入ん謀計なり幸ひの所よて出會たり引擲んで都へつれ行は一かどの褒美よ預らんと獨點死弟子ともよ咄き示し合せ夜の七ツ頃よ宿を立出上方の方へ行で三島明神を横み見て二日町といふ野はづれの森よ四人の弟子とも諸とも身を忍び今や遅いと待居たり斯る事とへまらず姫君右京之進を三島より兼海へは五里なればいと心易いと夜明方に宿を立出何心なく通りかゝると待伏したる四人ばかりくと立出兼塚荒五郎殿の仰を受是まで附來りま者ともなり早々汚園姫を渡すべしとは

らくと立懸り姫の御手を引立れば右京之進嘲笑ひ兼塚殿よ姫君何の用あらん全く己等ハ人買なんといふ盜賊ならん公家侍の手並を見よと刀引抜切て掛れば物もいはせずと四人も抜つれ火花を散して戦へとも老功の右京之進二人に手底を負せければ驕りの二人大よ驚き四途路に成りて逃出すを己等詞にも似ぬやつ原哉老人の手諫を見よと追かけ行に姫は手を揚やよ右京之進長追せそ早歸れと宣ふ後より思ひも寄す六尺餘の大男顯れ出裝をも云す姫を小脇よ抱き締してやたりと野道を横をりに沼津の方へ馳行に姫ハ魂天外に飛只今殺さる、よやと思ひ給へば此時なりと六道能化の地藏尊斯る難儀と助給へくと心中に念じける然る所よ六尺計の大坊主衣の上よ刀と横たへ大成柄抄ともち忽然と顯れ出三上山が前に立ふさかりかの大柄抄を差出一其姫と鉢へといふふ三上山大よ驚き汝何者なれば此所へ出て邪魔をなす片寄るべいと怒ければ此大坊主大よ笑ひ是は日金山地藏堂建立の坊主なり其姫を評進せよと云儘に三上山ヶ手を取姫を引分れば百々右衛門怒りに堪かね物とも云すわしやぶり付を坊主も大力と見ぬて互よむす組暫くもみ合しヶ兩人細き畦を踏くつし深田の中へまろび落上よ成下に成いどみ合けるが坊主の力や増りけん深田の中よて三上山を日

より高くさし上げ沼の中へ真さかさまに投込たり姫は此僧の恐しきも猶更慄々としておはしけるを彼僧近くたち寄必ず我と恐れ給ふな野僧は父の卿のおはす近所も住ものなり心易思一召父の卿も逢せ参らせんと姫を肩に引かけて飛が如く他所へ行けん影も形もなかりけり三上山の大方の坊主も投付られ貞も體も泥まぶれになり漸々這上りければ痛たへかたくなかたへの流よて顔を洗ひ暫く息をやすむる所へ四人の弟子も各々薄手を負はうくの体にて逃來り扱々達者の老人め中々手に合すさす命からく逃参つたり關取は如何成れやと尋れば三上山苦しげも我も姫を奪ひとり何國よりか大坊主來も某しを泥の中へ投込み姫を奪ひ立退たり勿々褒美所にあらす此跡にては通一駕ならでは浪花への歸られまじ先沼津まで我手を引つれ行吳よと四人の弟子も手と引れ漸々にして歩行けるこそ心地よき湯園姫は夢の心地にておはしけるも此大法師いたはり参らせ必ず心を痛給ふな今宵の愚僧が庵よて一夜を明し給へ右京之進も必ず尋参りゆへんと凡四里許歩行と思へば奇麗なる庵よ伴ひ則ち愚僧が草庵よてゆ姫君嘆空煎よかひすらんなれども愚僧今朝より託鉢よ出たれば飯さへ焚す是なりとも召上られ飢を凌ぎ給へと奇麗なる器に小豆の餅と入茶と参らすれ

ば姫のゆふべ三島よて地蔵尊へあげたる餅と同じ餅なれば食かねて居たりしが此法師答をもて切てひらに食給へと勸めけるゆえ飢に勞れ給へば少一食給ふよ味ひ美なるゆえニツ食し給ふに早腹みちたり暫くまどろみ給へ我の誦經せんと一間よ入けるが姫の只右京之進が事計と心よ懸りて細き灯火の許よ越方行末の事ども思つやけ是に付ても地蔵尊のみを念じ居給ふにいつしか旅の勞れもや眠り給ふ然るよ夜丑滿の頃と思しくあいたしく人音して鰐口打ならし南無地藏菩薩姫君の行衛を知しめ給へと高聲よ願言する者あり其聲に驚き姫の夢覺めければ豈計らんや奇麗なる草庵と思ひしは日金の地藏堂よて灯火の則ち地藏尊の燈明よてぞありける姫をあたりを見廻し給へば桃井右京之進地蔵尊よぬがづき一心に願言して居けるにぞ姫の餘りの嬉しさよや右京之進自らハ愛よあるぞと宣ふ聲に右京之進仰天して四邊を見れば湯園姫悠然としておはしけるゆる躍上りく悦び勇事限りなり某し今朝四人は惡漢を追散し立歸り見るよ姫君のまよまさすこは口惜や奪ひとりと沼津れ方へかけ行よ誰言となく姫君は日金の修行者負参らせて熱海の方へ行しといふを聞て扱て修行者を頼みて熱海へ涉越もやと日金の修行者を道々尋参り一に此所なりと教ゆる人あり立

より見れば地藏堂なれば姫君日頃念じ給ふ地藏尊の應護をたれて姫君は逢せたび給へと念
 じ未だ終らざるに姫君此處を参らする事の有難さよと物語るよ姫も奇異の思ひをなし修行
 者の我を負て我草庵なりと此所へ伴ひ飢と凌がせんと夕べ三島にて地藏尊へ備へ一如き餅
 を我と與へ半の食して其半の爰より見せ給ふ右京之進も心付て能く見れをゆふへ紙
 を敷て備へし餅なり一ツ残りて如何よと姫君あたりを見廻しけるにつれ來りし修行者
 は本尊地藏菩薩に寸分違はず衣の泥になりたるは最前三上山と田の中よて組石一時の泥な
 れば姫君も隨喜の涙よむせひ有難や我危難を地藏菩薩の救ひ給ひしならん争で此御恩と報
 じ奉つるべきと泣伏し給へば右京之進も伏拜み世の末世も及びても日月は地よ給給はず斯
 る難驗あらたなる事の有難さよと涙せきあへず程なく夜も明ければ地藏尊での人々來りて
 姫の姿を怪みければ右京之進取敢ず是は都方より熱海へ入勤の者なり是より法いか程な
 るやと問ければ里人答へて爰の日金の地藏と申て是を下りたまへば笠巻山熱海へは一里よ
 足らずゆと教けるに大よ悦び右京之進も昨朝より飢たれば此處をたへけるよ精神漸々健康
 になりけれを偏よ地藏尊の御利生なりと大よ喜び熱海へころ急ける



浄土の御恩
 修中納

新

○中納言殿親子對面の事 并御國姫の孝心によりて父の病本復の事

夫より兩人の慈巻山と下り熱海に至り流され入瀬井中納言の住給ふ庵は何國と尋るに里人答へて其中納言殿とやらは去年より戻た、す筈となり給ひいざり歩行人よ食を求め何國に住居といふ所もなく此里に食なき時ハ伊豆の山へ行て食を求めけるゆる里人憐み車を拵へ其上に家根をふき星を我住家としておはするよしなりと云ければ姫を聞て有よもわれずやよ右京之進父上の乞食と成たまふもしらで二年三年浮々と暮しける返すも悲まけれ早く尋て逢せて呉よと宜ふうち里人あれ、あの車の音ころ中納言殿なれといふより早く姫ハ轉び行てのふ父上御園ころ参りて侍ると車に取付投給へば父の脚も涙せきあへず昨日迄も今日迄も都の事のみ懐しく如何成しと明暮思ひ暮せしに恙なく是まで尋來る事返すもくも嬉しけれあれなるは右京之進なるか長の旅路姫の介抱祝者せり我去年より疝癩にて終は覺と成此里の人々の恵みにて漸く命をつなぐ計我形を見よ鬼界が鳥の俊寛もよも是程よあるまじと涙雨の如く下りければ右京之進恐れ入仰れ趣き一々某が罪なり去年より姫君一時も早く伊介抱には越あり度旨仰ありかとも心お任せす漸々娘花の井が忠義お

より伊供中せーとあり一事も物語れば中納言殿彌々涙も咽び我故に花の井が身を川竹よ沈めしとな返すくも不便なれ所詮歸浴も叶はず斯る片輪となりぬる某し打捨て都へ歸り寶の詮議こそ肝要なれと宣ふよ右京之進承はり夫も浪花へ花の井参なば多くの人の入込地なれば心を込て詮議致さんと下郎ながらも源八諸とも遣はしたり某此所へ参る上は早く伊座所をしつらへんと所の庄屋今井何某がともよ行黄金を出し一日も早く家作を頼み入といふに今井も兼て中納言殿を憐み一事なれば大い悦び先々拙者方よ家作成就まで御逗留ありと中納言殿よ衣服を着替させ我庭上の温泉に浴し参らすれば姫は甲斐なく一襦袢を掛父の脚に浴させ参らするに乞食同様の人なれば終に此温泉に浴し給はず始て姫の手をもて痛所を洗ひなごし給へば少一伏よしと宣ふにぞ彌々力と得て浴させ参らせけるが夫より庄官今井ハ多くの番匠を集め我林の木を伐り夜を日よなして普請成就一如のみならず我庭上の温泉を座敷の中へ取り入るやうよあて中納言殿の浴所を營ひければ右京之進大い悦び多くの金子を出普請の料を賄ひ是へ移りければ姫は座敷よ浴室の出來たるを悦び父の脚を浴させ口よ地蔵の御名を稱へて洗ひけるよ其靈験よや一七日にいて痛と忘れ給ひ二十七

日よしてかゝみ一腰の延ければ右京之進大よ悦び是全く日金山の地獄の監獄ならんと夫より姫ハ日金へ日参し晝三度夜三度浴させたまふよ三七日とやよは少一ツ、歩行し給ふころ不思議なり

一説曰熱海の温泉家毎座敷の内へ樋を以て堰入る事此中納言殿より始りとかや

○花の井夕霧と改め伊左衛門逢事

扱も扇屋の亭主ハ花の井源八を召開我家へ歸り女房も引合すよ新町殿しといへども花の井よ續く器量の音あらずれば悦ぶ事限りなく夫より松山太夫といへるよ諸學を伏入させけるよ手跡つたなからず歌連歌琴三線香道までも抜目なけむ近々お突出一の新造よ出さんと所々へ觸る、よ諸客は此新造を買へんと其日遅一と持よける却説藤屋伊左衛門ハ不計なくも宿直之助殿癩病を得て諸國修行よ出給へハ今は京都に用事もあらず我内へ立歸りしが母番頭も花の井がふを隠しまらず自に居けるゆえ伊左衛門只花の井ケ事のみ心に思ひてうつくしと暮し勞疾の如く煩ひければ一人の伊左衛門なれば母番頭大よ驚きとましく療治を加ゆれども更よ其驗なく次第よ瘦疲勞ければ如何せんと諸寺諸山へ祈禱と願ける爰よ

浪花よ隠なき椀屋久兵衛といへる豪家あり藤屋同様の身上なれば常に金銀の取替至て心安ければ母妙閑久兵衛が妹と伊左衛門ケ嫁み貰はんと冒入れども久兵衛は合点せず苦き人え自分れ氣に入一婦人ならでは熟縁せざるものなり伊左衛門殿得心ならばいつにても進ずべし言てありけるケ伊左衛門病氣のよ一を聞見舞に來り様子を見ふよ全く氣の結ばれと見うけたれば久兵衛活氣の男なれば伊左衛門大よ恥しめ花浪よ一二と争ふ身上よて心の儘よならず病を生ずる事笑ふに絶たて斯ぐぞしせし心を打捨て青樓へ赴死給へ頃日扇屋より世お希なる美人新造よ出るなり則ち某がし相方松山太夫が妹女郎とな一三二日よは必ず突出しよ出すと松山方より中來りたり欺様の所へも出給へば心の晴る者なりと願れ共伊左衛門は花の井が事のみ思ひ外に枕は交じ思ひ詰とたれば只笑ふのみよて答へもせざりけるが母妙閑是を聞て久兵衛様の仰の通り終よ是まで遊所へも参らず此方西國方の大名方へ出入致せば折節新町などの饗應あれども伊左衛門は参る事を嫌ひ手代どものみ遣す程なれば自然と戀々數病ひも出ゆへば勞苦ながら新町へは同道下さるべ一と番頭諸とも頼みけるこそおかしけれ伊左衛門ハ心にいとまねども母への孝行と思ひ然らば日限を仰下されなば伊左衛門

中さんと云て別れける扱も扇屋方に花の井を夕霧と名と改め松山が指南よて八文字揚屋
入までを教へ其日よもなりければ椀久方へいひ遣けるに椀久の伊左衛門誘引して吉田屋
左衛門方へ来りけるよ吉田屋夫婦大に悦び椀屋藤屋の兩大盡様来臨の寔に夷大黒打割ふ
て恵方より来り給ふなりと善盡一美盡し櫻應ける椀久は兼て松山と深沈中なれば新造を伴
ひ早く来るべし水上は藤屋伊左衛門と云大盡なるそ急げく人と人橋をかけ、るよ漸々松山
夕霧を伴ひて出来る衣裳風流云べくもあらず夕霧も爰も晴と着飾一心の内に王昭君が胡
國へ捕られおも、ちして今日より何れの人と枕を交す事よやと森く胸を押静め貞さへも
得上ず松山よ引添て座よ直りけるが椀久の待かね扱々遅滞哉く我同伴の浮客餘り遅きよ
不興して既に歸らんとし給ふ早々盃を初よと松山盃を取上て椀久よさしければ久兵衛
其盃を伊左衛門にさして早く夕霧よさし給へといふに然らば左やう致さんと一ツ引受て
呑夕霧の君ふつ、か者の盃を浮受あれかしといふに夕霧のいとうるさき事とは思ひなぐり
其盃と手にとりて客の貞を能々見れば豈計らんや藤屋伊左衛門なりければ仰天して盃と
取落しける

○夕霧伊左衛門身の上を語る事

斯て伊左衛門夕霧の互よ貞を見合せこの如何にと仰天すれば夕霧は二とせ三年の恨み胸よ
逼り唯詞はなくわと計りよ伏沈み絶入計りよ歎ければ一座興を覺しこは何事と久兵衛驚ろ
けば松山の脊を撫やと夕霧何事ぞ一たな一心を静よと様々介抱するに伊左衛門一座と静
め各々必ず騒さ給ふな此夕霧といふの某し都よて内祝言までせし女なりいか成譯よて斯君
傾城どの身を沈めしそ我も此女ゆえ此程の病氣久兵衛殿お對し恥かき次第なり如何に花
の井某し大和より都へ出さま、く行衛と尋しよ姫諸とも伊豆の國へ下りしと聞て力と落し
今、身のいたつきとなりたり併一無事の對面の嬉しけれども斯る姿よ成たる事いと不審様
子を聞かまほしと有ければ夕霧は彌々恨氣胸よ逼り言のんとすれど口へ出す詮方なけれハ
懐より封ぜし多を取出し伊左衛門にはたと打付又さめく、と泣沈みければ伊左衛門は不審
晴す彼多とり上見れば花の井どの伊左衛門とあり開き見れば是迄のそもじを慰みなり椀
屋久兵衛といふ人の妹言号あれば如何でそもじ如きの公侍士の娘を女房よすへき殊よ大切
の金二百兩無心とは事可笑やそもじもなせに遣すべき金やある重ては文通も無用なりとの

文跡なれば仰天して能々見るに手代清八が手跡なれば初めて母番頭ははばんごうの所意しよいならんと悟りければやよ夕霧ゆきぎり此返事こゝろがへを見て嘸まじ々某たがひしを憎にくしと思ふらん全く母番頭ははばんごうか旨しよ合あせての事ことならん是こゝの我われ大和やまとふ在あける留生るみの中に源八げんぱち來りしならん我われは大和やまとより京きやうへ出いさましく行衛ゆきゑを尋たずなりと有あり事ことをもつはらふ語りければ夕霧ゆきぎり少しは親おやひも晴はるる宣のたまふも偏ひとなるまじけれやも手跡てしの君きみの筆ふでまがひなしと云ければ伊左衛門打笑いざゑもんうちわらひて如何いかも手跡てしは能似よたれやも是こゝは手代清八てしやうぱちといふ者の手跡てしなり我われと一緒いっしょに入木道いりぎだうに行我手跡いりてしよす分違ぶんちがはずと評判へうばんの男おとこなれば母番頭ははばんごう頭かぶ是こゝは書かせに疑うたがひなし去さにても憎にくきも番頭忠左衛門ばんごうちざゑもんなり疑うたがはせし事返ことかへすくも母番頭ははばんごうこそ恨うらまはしけ是こゝより我われ二百兩計にひゃくにんりやうの事に斯かる孝心こゝろじんの者を君傾城きみかたじに賣うせし事返ことかへすくも母番頭ははばんごうこそ恨うらまはしけ是こゝより我われ揚話やうわにして外の客きやくへは出すべからず是こゝにて恨うらまはし給たまへといふに夕霧ゆきぎりもやうく疑うたがひ晴はれば櫛くし久松山くしひさまつやま其外奉そとほう唄末社うたすえまつやも初めて色いろを直ただし扱さ々不思議ふしぎの事ことよて一座いざもまめりたり是こゝより目川度改めがわらためて浮祝言うきいざなの盃さかづき給たまへと皆々浮立酒うきたてしよ關せきのよ及び各々醉よめに乗のりじ夫おとこより関中せきちゆうに入いて二とせ三とせのうさつらさを動語うごごりけるころわりなけれ

○源八角力取と成雷電と名乗事 井屋伊左衛門居續いざゑもんゐつづて放湯はうたう成事

却説かえりい源八げんぱちは花はなの井いを扇屋あふぎやへ渡し八十島吉平方やちじまきちへいへ來り段々禮謝れいせするに吉平きちへいいへらく足下そつかひ今いまより主人しゆじんもなし老母らうぼ幼いなき兒こを養やしなふたつきよ困こまり給たまふべし是こゝより角力取かくりきとり成給なるか一いち如何いか様やうにも世話せわいたさん然しかる時ときは年々鎌倉かまくらへ通とほへば主人しゆじん中納言殿ちゆうなごんどのの安否やすひも常つねふ附給つひ日ひ非あらず關取せきとりと成給なるべしとある時ときには大金たいきんの給分きふんと取事とりことなればひらる我詞わがことばも隨したがひ給たまへといふに源八げんぱちも下地奸したちすまの藝げいなれば如何いか様やうも貴公きこうを汚おん頼たのみやなりといへば八十島やちじまうち悦よろこび角力かくりき年寄としよりを呼よび寄よせて源八げんぱちを見みせ相談さうだんの上雷電うへらいでんと名乗なを付角力中間つけかくりきちゆうかんへ入いけるに男おとこぶり能力よんりから飽あまで強つよく其上そのうへ生れ付つての早業はやわざなれば突出つきたしより前頭まへごうに入雷電源八いらいでんげんぱちと呼よび最負強さいふちやうき角力かくりきよて此度このたびの勸進角力くわんじんかくりきの雷電らいでん一人ひとりありと浪花中ななばなちゆうの評判ひやうばんにて流行はやりけるが今度こんどの大關おほいせきは丸山三上山まるやまさんかみやま關脇せきわしは八十島源氏山やちじまげんじやまにぞありける然しかるも九州きゆうしゆうの楯岩たていしとて六尺有餘しやくくわいゆうの男おとこ五日いっぴんごの間土まひだつちに付つき六日むいっぴん目め楯岩たていしの取組とりぐみ成なしが物の見事ものみことよ雷電楯岩らいでんたていしを投げれば見物大けんぶつおほい膽いを潰つぶし扱さ々雷電らいでんは手取てとりり哉かなと彌々いよいよ大入おほいりにぞ成なけるよ愈いよいよ七日ななひ目めの三上山さんかみやま百々ひゃくはやく右衛門ゑもん八十島吉平やちじまきちへいとの取組とりぐみ成なり其日そのひも八十島少やちじますこし怪我けがありければ此角力明日このかくりきあしたへ延のび一いちゆへんと行司ぎやうし斷ことりければ見物けんぶつ一同いどうに雷電らいでんを出いせと聲こゑ々に呼よへるよぞ年寄としよりも、今年こゝし初めての雷電らいでん數年關取かずねんせきとりの三上山さんかみやまよは合あはせじ

といふ雷電を開て私しやう／＼當年初出の角力取三上山關取を負るの知れし事なれば
 恥とも存せず一番取て見庭より願ひければ八十島も大に悦び其方其心ならば負ても恥にな
 らず勝てば手柄なり併し我とても容易よ三上山にハ勝べとも思はねば心を込て取るべ
 と云ひければ行司罷り出て見物多好み寄て三上山雷電と取らせ見入ゆと斷り言へば
 諸見物一同よ雷電早く出よとよめきける三上山百々右衛門は雷電を小兒の如く思ひけれ
 ば己今年初めて士俵へ出某し杯よ取組んとつづぶと野郎哉骨を打折重て士俵へ上られ
 ぬ様にして呉んと嘲笑つて士俵へ上りける雷電の心と静め透とねらつて居る所を三上山狼
 の吼るが如き聲を出しえいといふて人礫よせんと刻掛るを雷電の右へはづし左へかえし飛
 鳥の如く飛廻り容易よ取付せねば三上山大に怒り無二無三よ組付所と腕を取て士俵の真中
 へ苦もなく打付けるは目覺りける次第なり見物も山も崩る、如く鳴響き投たり雷電勝た
 り雷電と多くの纏頭を貰ひ勇み進んで入よける三上山の何程の事有んと侮りしむ士俵へ打
 付られ面目を失ひ是より雷電を憎む端とぞ成よける夫より雷電ケ評判鳴響き聞取並の給金
 よ成ければ母も悦ばせ此度鎌倉へ赴きな中納言殿主人右京之進殿も目よ掛り大坂

の始末をも物語りせんと鎌倉の角力を待よける斯て藤屋伊左衛門は計すら花の井に面會
 て其日より宿へは歸らず居續になければ母番頭大に驚きささく迎の人を遣一けれども
 似々の意恨あれば馬耳風の如く更に聞入され母も枕屋久兵衛を深く恨み篤實の伊左衛門
 を斯様の傾城買になしたるも皆久兵衛の業なりと始め頼みし事は打忘れささく惡縁にい
 ふは皆是世上の習ひなり

○驚塚荒五郎夕霧よ懸想する事 伊左衛門勘當を受る事

爰よ驚塚荒五郎ハ在京の内さま／＼の悪行となし宿直之助を癩疾となし歌仙の色紙を盗ま
 せなど其積悪もや將軍も行跡の宜一からざるを憎み給ひ終に國へ歸し給ふ夫よりハ國住居
 なしけるが病氣を云立浪花津へ出養生として逗留抱へ角力取三上山百々右衛門を召呼
 び酒の相手となしいつしか新町へ來り阿波大盡と名乗扇屋の夕霧を見初吉田屋喜左衛門
 より度々呼出すといへども夕霧は伊左衛門が揚語なれば外の客へは出ざるよ一夫よ是と憤
 ほると雖も彼の浪花一二の豪家なれば大名の手にも及ばざるは金銀よて獨り心と痛居ける
 が伊左衛門は此阿波大盡と張合金銀を惜まず遣けるゆゑ二年餘りに二万兩計りも遣ひ込け

れは母番頭大に驚き斯て置なば藤屋の身上残りす傾城に打込べし家より替難しと親類打寄
 伊左衛門を呼付段々云聞せけれども聞入されば詮方なく紙子一衣を與へ勘當とぞ一たりけ
 る然ば伊左衛門も初めて夢の覺たる心なれども夕霧を花の井といふ事を云す斯る身持も成
 たるも全く母番頭の心よと却て兩人を恨み物をもいはで出行けるが夫より何國を當とい
 ふ處もなく扇屋へ来るよも紙子の身の上成たれと面恥かしく漸々にして夕霧は出會ふ云々
 の事、物語れば夕霧へあるふもあられず是皆わらひが罪なり如何せんと思案せしけ斯る汚
 身になり給ひてハ勿々曲輪にても寄付やまじ一先京都の源八が老母の方へ行て愛を凌ぎ給
 へ我子伊太郎も最早四ツよなりぬれば是を心の樂しみ暫く難儀をなし給は、又能思案も
 あるべしといふに伊左衛門涙を流去某しハそなたの心を嬉しく思ひ浮々月日を送り終ふ京
 部の焼が方へ音信さへせず今更斯る身も成て争で世話も成べきと勿々受引ねば夕霧とま
 じ諫れども假令飢死ればとて焼が世話ハならずと言切けれハ夕霧又思案して京橋よる
 はさば折ふしは汚貞も見んと思ひて斯中せーがしからは伊豆の國熱海よは中納言殿姫君我
 父右京之進殿今は勿々配所の如くハなく緩かよ暮し給ふと聞ぬれば暫く是へ行給ひて汚勘

當のゆりるを待給へ汚一人子の事なれば汚袋様争で長く勘當なし置給ふべきといふよ伊左
 衛門も得心して右京之進殿よも僅二百兩計りの事よて似状とは言ながらいなみ遣一夫ゆゑ
 斯傾城よなり下りたるも皆我咎なれば是とて面は會されねども母番頭が所意よて斯る事
 に成たると言譯ながら伊豆へ下らん斯る姿よて浪花よ烏鷺つき藤屋伊左衛門が形を見よと
 後指さしれんもいと口惜其内よは腕久を頼み勘當の詫をもせんと松山よ逢て勘當の詫の事
 と久衛兵殿よ偏よ頼み参らせよと吳々頼ければ松山は涙おむせび昨日よ替る汚有様嘸々口
 惜くも悲しくも思すらん併し夕霧の事ハ我付添居る上は汚心易かれ汚勘當免るまでの此姉
 け外に枕は交させせよまじ汚勘當は事ハ久兵衛様能よ計らひ給ふらん是計が君への汚餓別な
 りといふに夕霧も伏拜み妾仲伊衛門様よ離れおばいかなる人よも肌を觸んがど是のみ心苦
 しく思ひしは姉様の汚詞よ力を得ゆと悦ふ事限なり斯てあるべき事ならねば泣々伊左衛門
 は出行けるよ夕霧は身も浮計よ泣悲み松山もどもよ涙よむせびける夫より伊左衛門は伊
 豆の國を心ざして行んと編笠打冠り日頃覺え一縷を門々に立て一錢を貸ひ露の命をつなぎ
 鳥が鳴吾妻へ赴くこそ淵瀬と變る世の中と墓なかりける次第なり松山ハ扇屋の亭主よ向ひ

て旦那も存の夕霧が身の上伊左衛門様今勘當の身と成しかども程無勘當もゆり侍らん夫迄夕霧の外の人よ枕を交せては姉女郎の松山伊左衛門様へ立中さす何とぞ夫は座敷計り勤めるやうよな一下されよと頼みければ扇屋の亭主も扛點き如何も是まで伊左衛門殿二万兩計り遣ふ程の大盡なれば今の勘當の身となるも程なく勘當もゆりなん是とも夕霧か催き置たる事なれば外の奉公人との違ふべし氣儘勤めよと揚屋へ夕霧は座敷計と觸ければ各々不審して傾城の座敷計りと仕組の富札の取といふ事なしと笑ひける男自漫の客は己座敷計といふとも度を重ねて呼ばば阿の方より帯を解せて見せんと却て夕霧とどなたたこなたよりひひて流行ける

○源八が母艱難小兒を連れて浪花へ到る事

斯て千本通りの老母の花の井より預りし小兒を大切に育てければ折ふ夕霧より金子を登せ不自由なく暮せし伊左衛門勘當より我身さへ儘ならぬ身の上争で老婆の方まで心を付る事なるべき次第に音信さへせず源八も此程長崎へ角力も行ければいつとなく家哀へ其上去年より眼病を煩ひ終る雨眼しいければ漸々五ツよなる伊太郎と枝柱と頼み暮せ

よ伊太郎頻りよ父母を慕ひ浪花へ行たしと歎ければ今は京都に在ても一飯を助くる人もなければ僅の家を賣代な一少しの銀子を懐中ふして伊太郎よ手を引れ浪花津指て歩行けるが夕霧を尋んとは全盛の太夫職よ乞食の焼け尋ね行ては勘の恥ならんとは是へは尋ず藤屋の様子を聞けるよ伊左衛門は勘當受行衛しれずとの事なれば力を落しせん方なければ長町邊の乞食宿にありて日々住吉天王寺邊の人立多き所へ出前よ主を養育よ一の書付を出し伊太郎は旦那様一錢下されよと付歩行一錢二錢と貰ひ其日を送りけるこそ不便なれ却説阿波大盡荒五郎の伊左衛門よ傾城を買まけ口惜く思ひよ伊左衛門勘當受て行衛しれずと聞て大よ悦び霧夕を手よ入れ時節到来と其日より揚詰よなしければ夕霧を座敷計よて一度も床へは入されば阿波大盡心に怒ると雖も此指計の金銀權威にても往ねばさましく詞をもて音奇れども霧夕は返答をもせず只うつと伊左衛門の事のみ思ひ暮しける三上山百々右衛門も日々率頭よなり新町よ来りけるが扱々太夫様の物思ハ一き負付いつよても酒の興も覺果るなり明日の天王寺より生玉へ遊覽あり君の心と慰め給は然るべからんといふに籠の鳥同前の夕霧野邊へ出なば少くは愛を忘る、事もありなんと天王寺参詣の事と阿波大盡よ

願一かば大い悦び是は一興ならん天王寺より浮瀬の遊び百々右衛門宜しく計らふべしと各々悦び勇み行厨提重を持せ引船禿諸とも天王寺へころ詣でける

○夕霧伊太郎は黄金を與ふる事 三上山老姥を殺す事

斯て夕霧も阿波大盡に誘はれ率領に三上山百々右衛門毛毳を打かたげあたりを拂へば夕霧が艶色三上山が大男に物見武き市中群集をなして附歩行ける合邦が辻より天王寺へ詣で天より清水浮瀬より來り幾代君がための大盃めて吞かけ浮瀬に至て阿波大盡三上山諸とも大は酩酊して打倒ければ夕霧を引船禿を打連裏の小門より勝漫坂の方と靜に見廻るよ前に書付を置き賤かららぬ老姥の盲人六ツ計の子を傍に置き往還の人々に一錢を乞ふさす夕霧はあはれと思ひ引船に鳥目を遣ひせよと云て能々見れば源八が母なりみい如何よと側なる書付を見るに主人幼少と養ふたつきとあり扱は二歳の時別れし伊太郎よやと見れば見る程伊左衛門は生寫なれば悲さやる方なく如何して盲人となれり故斯まで落ぶれいと問んとするよ引船禿は恥らいあらはし聞れず聲を幽てお姥どのいつより盲人となり其子はそなたの孫よやとしれぬふりよ尋れば盲婆會釋してそなた様かは存せぬとやさしくも浮瀬下るゝ

事かな長々一死物語りなれども浮瀬聞くだされ姥が主人の娘御此子を妾お預け身を賣主君へ忠義を立たせ其後折節も心附となり給ひりけ去年より音信もなし一人の悴も有ぞ是も長崎へ参り便もなし其内は婆々は眼を煩ひ底眺といふもれにて終り盲人となり却て此子の介抱し預り最早諸道具衣類まで賣代なり烟の足しとせしよ此子が類は浪花へ行たし泣けるゆゑ此子の兩親の當地よあればたづね逢事もあらんと爰元へ下り父を餘所ながら尋れば勘當受て行衛去れずとの事夫ゆゑ力を落し世渡らたつきも盲人なればせんすべなく斯る街よ出人々の浮情を受待ると聞より夕霧はどろく胸を押解め猶も聲を幽め父をこそ行衛去れずとも當所よ母ありと知ばなぞと尋給はぬぞと云れて老婆は涙に咽ひ夫は此子も明暮戀慕ひ給へども此袋袋へ今浪花は隠なき太夫職となり給へば乞食婆々が尋参らむ身身の恥と心よ心を取直し斯やうの姿に成しも今迄の尋中さずと書度毎よ夕霧は身も世もあられず胸を磐石にて打ら、心地して人目あらずハ我子を抱き上て名乗んものと涙を吞込苦さハ船を呑にも増りける伊太郎は夕霧をつくくを見て此叔母様へ何として泣給ふ泣すとも一錢下されよと袖にすがれば心なき引船禿ども、哀を催し婆々殿の咄しにて最前の酒

も啓果たり太夫様いざ浮瀬にて呑なほ一やさん浮出なされと引立れば夕霧はあるにあられ
ず如何せんど千々よ心を碎きしけ漸々よ氣を静め懐中より小粒十四五取出し服帛に包み是
々幼き人今婆殿の咄を問供は涙を催したりそなたよ是と進する間是にて美一き衣裳にても
拵へ貫糸へと差出せ伊太郎押藏を開き見て此黄色なる少なき物は何かならん只錢を下さ
れよといふよ老婆探り寄小粒を手に取大に驚き斯る大金を下さるゝといか成は方ぞや問渡
しや金といふものまらぬ子なれば是より八錢をたべとの能々乞食ふなり下り給ふかやと潜
然と泣ければ夕霧へ堪兼思はずわつと泣出しけるよぞ老婆心付此湯方は如何さま仔細ある
湯方ならん名を浮名乗下されよと探り寄きたなの婆々やと情なくもやり手の押こかいさ
あゝ浮瀬へ浮越ゆへと無理よ引立行けるが阿波大盡は夕霧が見えざる故方々と尋しよ乞
食婆々と物語るを仔細あらんと立忍ぶ小三上山も同じく來りて互に叫き合伺ひ居けるが泣
入さず小粒をやりしを又驚き見置て三上山も叫きけるの兼て夕霧伊左衛門ケ種とやせし
と聞一が最前よりの躰全く乞食の悴こそ伊左衛門が種れ小悴と相違あひまじ汝此小兒と奪
ひ取て來るへこやつと賣さいなみて我心よ國ふやといふならは假令鬼の如ら女なりとも

子の愛に引れていなむ事あるまじ雇竟の人買なれば必ず仕換する事なかれと云含め其身は
何喰ひ貞よて浮瀬よ歸り又々酒とぞ初めける三上山百々右衛門は立見様子を見るよ老婆
小兒よ向ひひけふの思ハざるよ結構なる金を貰ひたれば翌は呉服屋へ行て美一き小袖と胸へ
坊に着せやべー悦び給へ最早速りもなければ歸らんと薩を巻て打のたげお邦が辻の方へ伊
太郎に手と引れとばくと歩行ゆくを思ひおけなき後より老婆を打倒し伊太郎小脇よかい
込かけ出すと老婆は言づらうみに三上山よ足よ取付何者なれば此狼籍たどへ此身は寸断く
よ成とても其子の渡すまじとむいやぶり付を面倒なる遂めと片足揚て脾腹を丁と蹴るよ大
力の男よしたゝか蹴られし事なればきやと計よ血を吐て即座よ息は絶よけり然ば伊太郎や
れ婆よとあせるを手拭にて猿轡となし小言をほざく事なかれと傍を見廻すよ一人もあら
ざれば天の與へと長町の方へ駈行ける老婆の畑の中よ倒れ死けれとも乞食婆々なれば非人
とも打寄引かたげ技島へ打捨けるころ無惨なれ

○阿波大盡伊太郎を賣て夕霧を口説く事

斯ともしらす夕霧は阿波大盡諸とも駕よ打乗て新町へ歸りけるが老婆が云ひし事久々にて

伊太郎が貞を見て彌々伊左衛門が身の上と案じ心地悪しければ直に扇屋へ歸りける翌日の
 早期より吉田屋の迎來り無理な夕霧を連行阿波大盡と云く口説といへども心地悪し連物
 をさへ云ねば大盡大に怒り傾城の賣物にて多くの金銀を出し揚語になすは汝に枕と交さん
 爲ならずや勿論座しき計りといふ女郎は古來より其例を聞ず今日は某しも心を極たり彌々
 枕をかひすまじきや其方も心と定めて返答せよと日頃より變り氣色と變て云ければ夕霧は打
 笑ひ座敷計を勤る夕霧と存存の上呼び給ふは枕をかはさぬとて怒り給ふは君の無理なら
 めや外の人も枕と交し者計につらくあたらば御怒も道理ながら如何様の計方よも一度の枕
 を交したる事なき夕霧あたら口よ扇引かせ給ふなど煙草輪よ吹き取めはねと阿波大盡彌々
 怒り汝左程に難面心なら此方よも計らふ旨あり夫々三上山云付置し通りよ引出せと言よ
 り早く中庭へ伊太郎を高手小手よ縛め百々右衛門跡よ引添立出れば大鍋よ油を入其下よ炭
 火を焔々と起し持出るを夕霧一目見るよ伊太郎なれば仰天すれども爰ぞ大事と見向もやら
 ずありけるが伊太郎は夕霧を見て昨日の金と下されし叔母様其旦那様と詫言てはやう爰
 を解て貰ふて下され手々が痛いと思へば阿波大盡ほくくど打照す手も痛むべし夕霧



阿波大盡
 伊太郎責
 めて夕霧
 を説く

此小悴覺えありやと尋るよ心を定めて成程きのふ勝漫坂にありし乞食の子み侍らすや如何にも其悴あり其方は何の由縁ありて多くの金を遣へせしやと問ければ夕霧打笑ひ阿波大盛様といわれ給ふ御方の多くの金をやりしはをかき仰事哉賤き勤へ致せども乞見よくれる金のいつにてもあれ程位は遣えしと云けるにそ阿波大盛打黙き成程全盛の太夫職なれば然も有べし然らば其悴いかやうよ賣さいなみても不便とい思ひすやと問掛れば夕霧早くも是を悟り假令伊太郎賣殺さるゝとも操の背まじと心を定め是はとらまき仰事かな乞見の子を賣たまふを妾何のため不便に存じはんと云ひければ阿波大盛大に怒り鍋なる油を柄杓よ受庭よある伊太郎が天窓より流し掛しにあついと泣叫べば驚塚夕霧が方をじろりど見やり此油次第熱湯の如く成とき命はあらず早く心を定め某しし隨ひ此悴が命助る心をなまきやと云ひければ夕霧打笑ひ乞見の子の賣殺さるゝが不便なとてそもじ枕に隨はんや可笑しき事を宣ふぞと酒を呑みてありけるが心の内は不便さ可愛き千万無量の悲しみを酒にまぎらし有ければ阿波大盛油の熱立を見て今是を掛れば小悴が命あるまじ不便の事と云ながら一柄杓さんぶと掛れば何かは以て堪へき伊太郎は七轉八倒して苦むさ

ま三上山も繩を取ながら今一柄杓掛れば誠よ命もあるまじ早々返事を仕給へと見上るよ夕霧の我身に熱湯浴る心地して心お思ふは幼少き時より姫君と地蔵尊を信じ一日も懈怠なく地蔵經を讀誦し信々片時も忘るゝ事なきよ斯る災難と余所よ見給ふ佛こそ恨めしけれ誠に佛の誓は偽りなりと地蔵菩薩を恨み猶も心の内にて伊太郎早く死で母が苦痛を休めよと千々の心を取直し見向もやらず居けるゆゑ阿波大盛も三上山も大よ不興し又一柄杓かければ骸の朱の如くなり虚空を掴み終に墓なく成おけるされども夕霧の見向もせざれば今詮方なく死骸と打捨いざや大座敷にて一盃呑直さん百々右衛門來れと打連たち奥深くこそ入よける跡を見やりて夕霧はとしや遅しと庭よ轉びあり虚しき伊太郎が死體にとり付扱も情なや生れ落るより苦勞のみをてて乞食よまで成下り今又母が爲に未だ見も聞もせぬ苛き責苦に逢て死なれたる我子の廿四孝よも増り孝子ぞや心を鬼になしたる母を不便と思ひて少しの恨を晴してくれよと前後不覺に歎き悲しみける斯る所へ禿ども追々にかかけ來り御客様待かねなれば早く御越おれと無理よ手を引奥座敷へこそ進行ける

○油かけ地蔵の由來

或書曰婦人室に在るときは父と天と一出ては夫を天とす。實に花の井の能是を守り傾城
と成ても其貞操と變ぜず我子を殺して操を正しうす。是天下の烈婦といふべし。却て説夕霧の
座敷の隙を伺ひ今一目伊太郎が死良を見んと抜出て中庭に來りのふ可愛のもの、有さまや
噓や若しく有つらん。焼はいかに成つるぞと問たさは山々ながら人目の關に隔られ詞をさへ
かけざるを母と一りなば恨みんよし。らでも若や助るかど我方計詠めし。可憐や不便やと人
目あらねば聲をあげ泣沈み。絶入計りに見えけるが漸々よ心を沈め切て。死骸を納んと
抱上んとする。よ女力も中々地も離れざればこの不思議と能々見れば我子よのあらで辻の石
地藏を高手小手に縛りめ油を注かけ。にてありければ夕霧仰天し。擧げ日頃念じ奉つりし地
藏尊の利生よて我子の身代り成給ひし。勿躰なくも最前は心の内よて地藏尊を恨め参ら
せ。一事の恐いや死させ給へ。と禮拜。然も我子は何國へ逃げんとあたりを見廻せば叔母
横坊は爰に隠て居ると椽の下より遣出ければ二度驚き。あの恐まき者ども何としてそなたを
縛めず此石地藏を縛めし。よやと無端嬉しく尋ねば伊太郎も不審。暗す夕霧の大き成男を
黙一坊と奪ひ。爰へ入りて來り。おいつの間よやら繩の解けたれば。つと椽の下へ還入。

かゆふべうら寝ぬゆゑに椽の下で寝入し。叔母椽の泣聲に目が覺し。と開度毎。よ地藏尊の利
生を奪ひ。然も老婆へ三上山よ殺されしとや扱も。情なや昨日逢し時。も我ども知ぬ旨
人の身の上を悟りし時。の悲しとつらと身を切やう。お思ひしに噓や此子を奪ひ取れ。とさは
口惜くありしならんいと。おまや伊太郎と抱しめ泣居たりしが。太夫様と。呼立る聲よ驚き
ろなれを又悪者どもが見付なば。今度いか成目よや。あはん先此小袖櫃を隠れて。香せぬやう
にきて居やと伊太郎と押入。蓋引。め石地藏を力にまかせて。漸々椽の下へ隠。左あらぬ。舂
て奥座敷へこそ到りける。阿波大盛三上山諸ども立出ひ。一壁にていかよ三上山。我此程に
揚代催促するゆゑ留守居どもへ。言付し。よ伊國元より若殿の御用にては。一錢も差出す事な
うれと仰られ。ゆゑ罷成ざるよし。最早此後の金銀自由。に成まじ。先年盗ませ置き。一公任の
色紙。此是送け肌身と離さず持たるが是を出入の町人。櫛屋久兵衛方へ持行。此家代々の重寶な
れと急に金子入用ゆゑ。據ころなく質物よ入るといふて。金子五百兩借受來るべし。必ず。悟
られなど。叫いて色紙を渡せば。姿細香込。出行ける暫くありて。金五百兩と質札とを。持來り荒五
郎と。呼出し。金質札と渡。一椽屋方よても。伊大との寶長くは。預りやまじ。けれども。急御用に。ゆへ

は金子差上り間必す急に金子御返濟下さるべしと呉々も申されしゆとふ夫の心得たり
此賃札我手にありて詮議の手懸も成べし其方預り置べしと叫び合骨折代なりと二上山
に二十兩を與へ夫より吉田屋の亭主は揚代其外を拵ひ又々大騒ぎをぞなまよける

程経て吉田屋喜左衛門が襟の下より石地藏を見出し大に驚きはまさしく天王寺道分の地
藏なり如何して此所へ來りしそ勿射なしと男どもも云付元の所へやらんとさし荷て來り
しに船場の邊りよて俄に此地藏磐石の如く重くなりて一足も歩行れね此所は捨置歸り

けるとなり夫より此地藏尊願を懸るふ繩ともて一ぱり油をうくるよ靈驗著るく日々繁昌
し今其所ありて油うけ地藏尊と唱へ諸人を救ひ給ふぞありがたき

○驚塚荒五郎勘當を受角力取と成事
斯て夕霧は伊太郎と小袖櫃隠し扇屋へ歸りけるが勤の身なれば詮方なく八十島吉平を
密に招き何卒源八長崎より歸る迄預りくれよと頼れば八十島二言とも言はず心能受引伊

太郎を我家へ歸り實の子の如くいつくしみ育ける扱も扇屋久兵衛は公任卿の色紙を質に取
けるが番頭言やう此歌仙と申の天下に只三十六枚ならでいなき寶と承まはり申阿波の大

守所持と申事も是まで承まはり申さず偽物までもやゆはんしか阿波へ御聞合せに遣され

孫々御寶は相違なくは御預りなされ偽物ならば早々返しなされゆへと皆々口を揃ていふ
に久兵衛も尤に思ひ阿波へ手代を遣し若殿様急よ金子御入用なり速御家の重寶公任

卿の歌仙を御遣しなされゆ付金子五百兩差上右の寶御預り申置い何卒早く御受戻し下さ
ゆ様よと申遣しければ家老用人肩とひそめ其歌仙の色紙と申は天下のみ一物にして代々

柳井中納言殿預りなりしが先年紛失して中納言殿其罪よりて伊豆國へ遠流ありしと聞傳
へたり若殿如何して御手ありや甚だ不審なりと大殿大膳殿に斯と告ければ大に驚死其歌

仙此方よ有と禁庭へ聞なば一大事なり荒五郎如何して手あ入しかはいらねども近年身持放
蕩よなり將軍にも御目よあづかり歸國を仰付られしよ又々浪花にて夥多しく金銀を遣ひ果

したるよ留守居共より度々申來りに又々椀屋より歌仙の事申來る事一大事なり一日も
早く勘當し將軍家へ訴へ置なば後日の難儀は懸るまじと家老笹山源治兵衛と浪花へ差遣し

荒五郎を勘當し直に將軍家へ御届申べしと云渡しければ源治兵衛早速支度して難波津へ來
り荒五郎に面會し大殿より勘當の旨を言渡しければ荒五郎大に驚き口を開んとする所を有

無を云とす足輕中間引立させし荒五郎の夢の覺たる心地にて寄べきなき身と成ければ
三上山百々右衛門方へ行て勘當受一越きを述何分頼よし云ければ百々右衛門も迷風ながら
是迄思になり一荒五郎なれば否とも云れず差置けるが笹山源治兵衛の夫より京都に登り將
軍家へ驚塚大膳の二子荒五郎儀行跡宜からざるよ付勘當仕り候旨相届け國元へ歸りければ
荒五郎を阿波大盡と名を取飛鳥も落る勢ひなりし昨日に替る世に中今の三上山の榊持
となりしが少一力量もあれば角力取と成り鳴戸岩と名乗を付けるけ流石大惡無道の荒五郎
なれども我身を恥て新町へさへ行事あらねば夕霧は此事を開始めて安き心よぞなりよける

○筒井宿直之助伊左衛門よ出會事

爰お筒井宿直之助は近習正木主膳甲斐くしく御供し西國四國の靈佛露社を巡拜し築紫
の果迄も見廻り惡疾を平癒なさしめ給へと一心願給ひ一故よや膿汁の出る事を正るとい
へども面貌の昔しよも似ず淺間しき貞形となり給ふぞいたは一き扱西國を巡廻一終りけれ
ば東國を心ざし美濃の浴汲より信濃の善光寺へ參詣せんと笠打傾け主膳諸とも歩行けれ
向ふより破れ編笠に紙子を着し謠を謠ふて來る者あり宿直之助殿も常に謠を好む伊左衛門

シテワキにて諷まが其音聲藤屋の伊左衛門よさも似たればイみ見けるに形格好も伊左衛門
に違ひなければ主膳も不審し藤屋伊左衛門よ是程まで似るものよやされど大坂一二を争ふ
豪家の争で乞食になるべきと目と定めて是を見るよ伊左衛門よはがひなければ大いに驚き
いかよ御身は藤屋伊左衛門にはあらすやと聲をかくれば伊左衛門仰天してこは主膳殿にて
おはするや若殿よてましますり御安鉢の鉢恐悦至極しかし我身のなれの果を御覽下されよ
とさめくと泣ければ宿直之助殿も哀と催一俱に涙お呉給ひしが去りても汝いか成事に
て斯け落ぶれ一ぞ不審しと尋ければ伊左衛門涙を押へ花の井お廻り逢一より似せ冬の意
氣路よて二万兩餘りの金を道ひ搽一始未まで落もなく語り君は長々西國巡禮より四國迄も
巡り今又何國へ行給え御心よやと問ければ宿直之助殿されは是より信濃の善光寺へ詣んと
思ふなり今一度元の宿直之助よなり度より外お望みもなく明暮佛神を祈るといひければ伊
左衛門沈吟してありけるが某し事も花の井が父伊豆の國よにて只今は中納言殿諸共ゆるや
かに暮しお趣きを承はり一先是へ行て勘當の詫を待べしと勧めゆゆる是へ下らんと道々乞
食して罷り通るよ盡ぬ渉縁とて不圖此處よて涉目よ掛りし事の嬉一さよ熱海よ不思議の

温泉ありて諸病平癒するとの事なれば是より直に熱海へ涉越遊ばされ温泉も浴し給ひなば
疹病氣平癒疑ひあるべからずと勸め参らすれば宿直之助殿頭をふり假令此病氣平癒する温
泉なるとも此貞とて争つ園姫よまみぬんと受引給えねば主膳詞をかへし結納こそ遣はさ
れずとも一旦涉縁を組れ一姫君なれば疹病の替りゆとも争でいなみ中へ一夫と嫌ふ疹心な
らは筋究たる疹姿にても心は鄙俗よをそれり然も姫の心をためし操を脱ひ給へと伊左衛門
諸とも勸れば宿直助之殿も其温泉よて元の姿よなるならべ取べきも有すと漸々得なして
夫より三人打連熱海へこそは趣きける

○涉園姫操を立る事 并宿直之助癩疾平癒の事

櫻井中納言殿の右京之進が忠節よて多の金を持來り家居をまつら座敷も温泉をたくはへ
是よ浴しけるよより病氣本復なりたれば夫より一手跡の指南又歌の事を教給ふに今は鄙よ
も心至りて和歌を好む者多くありかく遠流し給へばこそ和歌の門人となり直よ教示を受ける
事の有がたきよと夥多門人出來て月並の歌合せ或ひハ褒貶の歌の會を問なくあれば今は
中々有願も暮しけるか涉園姫も賤の手業を習ひ糸をとり機を織習ひ給へば右京之進は若者

共に劍術柔術を教へ次第く一門人も多く今ハ都よ在らんよりハましならんと思ひ暮し給
ひける扱も筒井直宿之助主從藤屋伊左衛門は漸々熱海へ尋行中納言殿の家居を見るよ中々
配所の住居と見ぬす家居つきく幾間も有ていと賑々敷暮しなれば伊左衛門大に安
堵し先一人入て伊左衛門ころ参りて候といふよ右京之進立出是を見て大よ驚きさてく斯
變り果たる姿に成たるをいか成事ぞと尋るよあり一事も語り途中よて宿直之助殿も廻
り合涉俱中て來りたりといふよ姫君まろび出夫の婿一や何國もまますぞ早々逢参らせ
しと表へ出れば知らぬ男二人イみ居ける故伊左衛門宿直之助様ハ何國もおひすぞ早く涉俱
してよとあるよ宿直之助弱々恥かひしく逃出んとし給ふと主膳引とめ無理よ内へ伴ひ参ら
せ某ハ先年伊左衛門が結納を持参せし正木主膳よて候主人宿直之助病氣平癒まで筒井家
を退けられ夫より諸國の神社佛團を巡拜し不計なく伊左衛門よ出會若殿を温泉も浴し疹病
氣平癒なさしめ再び筒井の家名相續あり度願にて是まで涉俱せしと荒増よ語りければ中
納言殿も奥より立出給ひ宿直之助を見てあないたはしや都廣一といへども並なき美男と聞
しが其面影はいかなる過去の因果よや心置なく此方に逗留して温泉も浴し給へ人の斯る落

目ころ大事なれ姫も此人と大事よせよと宣へば、御園姫は猶更争で自鹿略よ致し侍らん日頃念じ奉つる地藏尊の利益にて日あらずして本復し給へんといと心能宣へば宿直之助は猶更恥しく貞さへ上給はず某し斯る悪疾を受るも前世の悪業と思ひ断念て姫に出會事を恥何國へも行んとせしよ主膳お引とめられて面目もなき對面と涙よむせびければ姫はいよく涙にくれ必すしく心苦しき思ひ召事なかれ追付本復なさいめんと夫よと問なく座敷の温泉よ浴し姫は甲斐しく地蔵の御名を稱へ洗ひつゝ介抱したまふにぞ勿々他人の及ぶ所よあらずと主膳伊左衛門も感心して暫く此所にとままりける然るも或日宿直之助殿温泉の中よて顔よ胸あしく嘔吐しけるが數塊の虫腹中より出て熱湯の中よかけ歩行車魚の水を游が如く湯の本を慕ひ何國ともなく失よけり是より顔色日々美麗く二三日の中よ元の窈窕たる貞よ成ければ姫の悦び大方ならず是偏へに日金の地藏尊の靈驗なりと彌々傳心怠りなく今ハ氣力も日頃十倍中納言殿も厚く事へ給へと主膳悦びの餘り最早癩疾全快は一日も早く大和へ帰國ありて御兩親に御對面然るべいと勸るよ宿直之助殿も汝や如く一日も早く御對面中度も思へども四五年も漂泊して國の様子さへねば汝一人國へ歸り迎の者と遣

すべしと云ひければ主膳は旅の用意して大和をさして登りける

○雷電源八高家橋よて母の仇を復する事

斯とも知らず雷電源八ハ長崎の角力よて多くの金銀を貰ひ勇み進んで浪花へ歸り先八十島吉平が方へ來りければ思ひ懸なく吉平方よ伊左衛門の倅伊太郎居けるゆゑ源八大よ不審して其來由を尋るよ吉平涙を流し老母の乞食と成此子を伴ひ勝漫坂よて袖乞して居けると阿波大盡夕霧を手よ入ん謀計よて三上山に云付此子を奪ひ立退ゆゑ老母遣じと止るを蹴殺し夫より斯様くの事よて我方よ預り置しと浴もなく語りければ源八は天にあくがれ地も伏して母の死を悲しみけるが大脇差を引提かけ出すを八十島引留汝氣色をかへ何國へ行と問かけられ源八涙を拂ひいふよ及ぶ百々右衛門た寸断よ切さいなみ母の敵を取んと思ふなりといひければ八十島打點き尤もなりしかし母を殺せといふ證據なくては假令百々右衛門を殺しても解死人となり命を取れんさすれば實の詮議は河者がして中納言殿の歸洛は誰させ申急所よあらず心を諍よといふよ源八此一言よ心を痛め差俯ふひて在ければ八十島打笑ひ篤と心を諍なば是より直に高家橋の方へ行べし今宵三上山ハ高家橋の邊よ用事あり

て弟子どもを引連行一と聞たり急げ〜といふ源八不審きて唯今證據あくてハ人殺しと成と言て止め今又心と静たらを急げとはいかなる仔細ぞやと云けハれ八十島又曰我も跡より追付力を添ん初の儘よいで行なば心も儘過ちあらんと思ひて斯ハ止しなり人は斯様の時心を静されハ仕損ずる事あるものなり最早汝が顔色常の通り成たれば氣遣なし急げ〜と追立けるは流石名におふ關取なり夫より源八は韋駄天走り高家橋より來り様子と窺ふよ最早用事も果たりと見ぬて酒酌かは一夜も更たればいざ歸らんと三上山が聲して弟子鏡山湖愛知川草津山何も近江の産にて力立する惡僕どもなり鳴戸岩荒五郎を先よ立とや〜と橋へ來掛るを源八橋の真中よ在て如何よ三上山先日合邦が辻にて我母を殺したる事覺えあらん雷電源八とくより爰に待受たり尋常よ勝負せよと呼はれば三上山はじろりと見やり雷電は長崎よりいつ歸りし我生れ付て小氣者よて人を殺すなど、いふ事生涯覺えなり人違ひなるべ〜と空嘯ひて相手よならねば卑怯なり小兒を奪ひ取んため邪魔になる母を殺せ一事相違なり立上つて勝負〜と詰寄ども汝如何様にいふとも知ぬ事ハ知なり證據あらば出すべし其ときハ男なり勝負してとらせんと立會氣色あらざれば源八も證據に困り如何

せんと躊躇所よ其證據是よありと伊太郎を抱き八十島吉平橋詰よ仁王れ如くつ、立たり三上山伊太郎を見て大よ仰天し日外責殺せ一小悴此所よありとハ扱は此小兒めが喋りしならん最早百年目相手よなつて呉ん昔の者ども源八めを打殺せと皆々大脇差引拔穂先と揃へ切て斯ると五人を相手よ大わらはよ成て戰ふ有様は目覺〜かりける次第なり先に進む鏡山を眞二ツみ切倒し返す刀よ湖は腰れつケひを切離され橋より下へのたりける愛知川草津山物をも言ず双方より切付るを早足の源八二間計り跡へ飛舞れば相打よ成て倒れける是を見て荒五郎叶のじとや思ひけん逸足出して遊行を八十島吉平小兒と抱ながら鷲の小鳥を掴むが如く片手に引提げ手早繩を巻懸よける三上山百々右衛門は橋にもたれ炬草を吞てありける源八が働きを見て公家侍士の間中め餘程おぢをやる某一ヶ引導して閻魔の廳へ送り遣いさんと三尺計りの大脇差引拔には角力の意趣もあり幸ひの所なりいざ參るといより雷光の如く飛懸れば心得たりと互よ浪花の鬨と關火花を散して戰ひける源八ハ一心に親の敵と思ひ詰踏込〜切付ればさ〜もの三上山あ〜らみ兼逃出す向ふには八十島吉平力士の如くつ、立て此所を一寸も通すまじと大手を廣げ待かくれば此時百々右衛門刀法乱れ大腕二

ケ所受たちろぐ所を疊かけく遂に切伏留をさしける此騒動は兩町より梯子を持出往來を
 塞ぎ源八を生捕んと遂くを八十島聲かけ是は親の敵打なるを楚忽一給ふなどいふ所へ早處
 の縣令組子數多召連召捕に向へば源八八十島詞を捕へ是は親の敵打候と高らかなる名乗け
 れを縣令詞を改め親の敵打にもせよ汝等は町人ならずや吟味濟まで八細掛れとありけるゆ
 へ源八利に伏し尋常に腕を廻しければ組子高手小手に縛めける縣令死骸を一々見分するよ
 三上山々懷中より五百兩の質札に公任直筆の歌仙の色紙とあり源八見るより大に驚き其色
 紙ゆゑ主人の遠流の身となりなり扱々能物を見出たを何ぞぞ御見せ下されよと提灯の明
 りよて篤と見て此質札に椀久の二字をすゑし印判あるの正一椀屋久兵衛方よ色紙はあ
 り心せく儘三上山よ留をさし詮議の種を失ふたりと大に歎けは八十島聲かけ源八歎く事
 なかれ斯る事も有んかと三上山が弟子鳴戸岩を生捕置たりと檢使の前より引出し何分此者を
 搦門遊され候の委細相分りやべーといふ縣令も八十島を稱し汝が働きた晴なり源八が
 事ハ心よ懸る事なかれとあるは源八悦び某一斯る細目よ逢ふてある上の八十島何卒我變り
 伊豆の國へ立越色紙の有所一れたるよ中納言殿へ一らせせてたべと聞より吉平打點き汝心

と勞する事なかれ是より此子と宿し殘し伊豆國へ赴き吉右左を知らせんと勇み立ば縣令ハ
 源八鳴戸岩を引立双方へ別れける

○八十島吉平伊豆國へ赴く事 中納言殿御歸洛宿直之助御園姫婚姻の事

天より八十島吉平ハ伊太郎を宿に残し韋駄天の如く晝夜の別なく伊豆國へ來り源八が三上
 山を殺し公任卿の色紙の有所椀久方よあるよ一委まて語りければ中納言殿悦び宿直之助
 有京之進も歸洛の綱こそ出來たれと勇立ば伊左衛門椀久ハ某し久一ハ朋友なれば色紙さ
 へあるならば早速手あ入中べーと八十島同道して狼花へ歸るよ藤屋の妙閑も次第よ老衰す
 れば一人の伊左衛門なれば勘當をゆるさんと番頭忠左衛門よ云付所々尋し所此程ハ伊豆よ
 ありと聞て忠左衛門族の用意して立出るに水口の宿よて八十島伊左衛門に出會大に悦び勘
 當の詫相叶ひ迎ひよ來りたりと互に無事を語り夫より浪花へ立歸り母よ面會して夕霧が忠
 孝子までなしたる事と語りけるよ母も其真心を感じ早々孫よ逢べしと八十島方より連來り
 一目見るよ伊左衛門よ生寫しにて其發明なる事幼少の子の及ぶ所にあらねば大に悦び妙閑
 ハ片時も傍を離さず寵愛一方ならず伊左衛門は母よ金子五百兩あらば椀久よ是を渡し公任

の色紙を取返し中納言殿の歸洛を願たしといふも母も夕霧が貞節伊左衛門も伊豆よりて世話よなりし事を思ひ金五百兩渡せば直に腕久方へ行て色紙の始末を語り金と出すに久兵衛色を失ひ斯る盗み物ともいらず阿波大盡家の重寶といふに質と思ひ質も取たり金子よは及ばずと金をも取らで色紙を返しければ伊左衛門へ將軍家へ色紙を持参し駕塚荒五郎が盗ま段々中上則荒五郎の縣令所に召捕れ罷り有よ去訴へければ將軍家より下知有て荒五郎源八を召連來るべしと早速召呼れ荒五郎と殿々と拷問あるも三上山に色紙を盗ませ直宿之助と毒藥よて癩病となしたる事をも夕霧を手よ入んと三上山よ言付源八ケ母をも殺せまよし一々白狀に及びければ源八は親代敵討に相違なければ早速赦免あり荒五郎事は重罪逃れがたくまばり首に所せられける將軍家より禁庭へ色紙を差上られ櫻井中納言の歸洛を願はれけるに帝敎感有て中納言殿早速歸洛仰せ付られければ再び花咲春に逢心地にて熱海より歸洛し給へば宿直之助殿よて主膳早速大和へ立歸り病氣平愈のよし仁圭入道に申ければ早速迎ひの大勢よ主膳を差添誠よ目を驚かかす行列よ目出度國入あり親子久々の對面有しよ伊左衛門も早速大和へ來り直宿之助殿の頑疾の全く荒五郎が毒藥を以て計ひ一旨白狀の趣

き中上げれば仁圭大に驚き早速將軍家へ直宿之助病氣平愈の旨申上るよ將軍も久々對面な給えざれば早速呼出され五六年諸國修行の事とも聞たまひ伊左衛門が貞節と感て改めて將軍家の涉媒約よて櫻井家より大和へ將軍家の歴々を差添られ婚姻ありければ仁圭の悦び大かたならず千代八千代と契りける直宿之助右京之進が深切の取計ひをことよ婚しと思ひ願屋より夕霧を受出し直宿之助の媒約にて再び伊左衛門よ婚姻なとしめ給ふ母妙閑も夕霧が貞節を聞て書替し似多の事を大よ恥いと陸まじく暮し孫伊太郎が發明を悦びける中納言殿の癡宅を筒井家藤屋伊左衛門より普請をなし誠よめざまし普請おて萬事心の儘よ暮し給ひける藤屋伊左衛門の家業を嫌ひ倅伊太郎に家督を譲り夕霧諸とも伊豆國熱海よて中納言殿の舊宅を修理し引移温泉を樂しむ一生閑居し暮しけること目出たけれ

明治十八年九月十七日御届
十月 出版

編輯人

不詳

定價四十錢

出版人

京橋區鎗屋町十四番地

野村銀次郎

大賣捌所

京橋區尾張町	上田榮次郎
日本橋橫山町三丁目	鶴聲社
同區同町三丁目	辻岡文助
京橋區南鍋町	免屋誠
日本橋馬喰町三丁目	山口屋藤兵衛
同區通り三丁目	丸屋鉄二郎
同區南傳馬町	春陽堂
同區藥研堀町	鈴木喜左衛門

東 京 圖 書 館

和書門

類

一函

七架

二三號

一冊



特43

110



091517-000-5

特43-110

夕霧郭文章

野村 銀次郎 / 刊

M18

DBN-2506

